

平成29年度 西濃学園教育報告書

文部科学省「不登校特例校」の指定を受けて
1年目の実践



学校法人西濃学園

目次

はじめに	2
実践報告会プログラム	3
譲西賢先生講演録	
「共に育ち合う教育ー心理発達と心理特性を自覚してー」	4
シンポジウム録	
「西濃学園の特例校としての取り組みの報告」	27
西濃学園生徒 日置達也 「私の主張」	83
西濃学園生徒 中村瑠李 「私の主張」(西濃大会最優秀賞、県大会出場)	85
実践報告会アンケート	87
実践報告会アンケート集計結果	88
学園写真 日常生活	92
学園写真 夏山登山・文化祭	93
学園写真 地域交流	94
学園写真 コラボレイト・リカバリー	95

はじめに

学園長 北浦茂

本年度は西濃学園にとって「飛躍」の年でした。まず中学校は文部科学省から「不登校特例校」の指定を受けたことです。

また中学3年生の代表が「第39回少年の主張揖斐郡大会」で最優秀賞に選ばれ「岐阜県大会」に出場することができたことです。さらに高校生は「第52回全国高等学校定時制通信制陸上競技大会」に高校男子2名、女子2名が出場を果たしたことです。これらの大会に出場した5名は個人の名誉だけでなく学園にとっても誇りに思える出場でした。

さらに学園内においても画期的な出来事がありました。夏休み終了と同時に私は急性胆嚢炎になり急きょ手術を受けることになりました。入院前は愛犬ゴンの散歩もあり早朝登校し、2ヶ所のトイレ清掃、校内のゴミ回収、手洗い場やトイレに設置してある消毒液の交換を、冬季は各教室等の灯油の補充をするのを日課としておりました。退院をして登校するとまず職員の方々が早朝から率先してトイレ清掃、校内の清掃活動に動き回って見えました。さらに高校3年生と2年生の5名がトイレ清掃、消毒液の交換、ゴミの回収、灯油の補充、高等部の長瀬校舎では3年生の女子生徒が食器洗い、男子2年生が校内清掃を中心に毎日継続して行い年度末まで継続してきました。また時々ではありますが中学生の有志も参加しているのを見かけるようにもなりました。当番や強制ではなく自主的にこの様なことが進められていることにすごく感動しています。

作業を続けている高校生は、早朝から朝食を作っていたいただいたシルバーの方に「おはようございます。ご苦労様です。」また私が作業をしていると「学園長、ご苦労様です。」と声が掛けられるようになりました。このような雰囲気が醸し出されてきた校風を大切にしていきたいと思っております。

平成15年4月揖斐高原のゴルフ場跡のクラブハウスにて「坂内新生塾」としてフリースクールを開設して以来本当に多くの方々の温かいお心を頂き文部科学省のご指導を仰ぐことができることは私ども職員は何事にも代えられない喜びで一杯です。一人ひとりの子ども達が無限の可能性を目指していける学園を職員心を合わせ全力を尽くしてまいります。これからも一層のご指導がいただけますようよろしくお願いいたします。



実践報告会プログラム

■テーマ 不登校生の未来を拓く教育を

～文部科学省「不登校特例校」の指定を受けて1年目の実践～

■主催 学校法人西濃学園

■後援 岐阜県教育委員会・揖斐川町教育委員会・岐阜県私立中学高等学校協会

■日程 2018年2月17日(土) 12:30～16:30

■会場 揖斐川町地域交流センター「はなもも」

■プログラム

12:30 開会の辞

来賓挨拶

12:50 議西賢先生(岐阜聖徳学園大学教授)講演

「共に育ち合う教育ー心理発達と心理特性を自覚してー」

14:10 休憩

14:25 西濃学園 生徒 日置達也「私の主張」

14:35 西濃学園の授業・行事・生活の紹介

14:50 シンポジウム

「西濃学園の特例校としての取り組みの報告」

司会: 嶋野道弘先生(元文教大学教育学部教授)

コメンテーター

松林高樹氏(文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長)

松嶋佑佳氏(文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導第一係長)

議西賢先生(岐阜聖徳学園大学教授)

三松里江氏(公益財団法人博報児童教育振興会)

北浦茂(西濃学園学園長)

報告 コラボレイト(真嶋良輔教諭)

リカバリー(中橋英吾教諭)

ライフ・プランニング(太田宣子スクールカウンセラー)

16:30 閉会の辞

※不登校児童生徒のうち、

・90 日以上欠席者

小学校13,738 人、中学校63,712 人、全体 77,450 人

不登校児童生徒に占める割合：小学校44.1%、中学校61.7%、全体：57.6%

・出席日数10 日以下の者

小学校 2,232 人、中学校12,602 人、全体 14,834 人

不登校児童生徒に占める割合：小学校7.2%、中学校12.2%、全体：11.0%

・出席日数 0 日の者

小学校 878 人、中学校 4,083 人、全体 4,961 人

不登校児童生徒に占める割合：小学校2.8%、中学校4.0%、全体：3.7%

不登校全体で、90 日以上欠席者が 57.6%、小学生では 44%、中学生においては 60%以上ですね。10 日以下しか出席していないという子は、小学生では 7.2%、中学生で 12.2%。皆欠席という子は、小学生で 878 人、中学生で 4083 人、全体で 3.7%ということです。

※不登校の要因を「本人に係る要因」で見ると、

・『不安』の傾向：「家庭に係る状況(29.8%)」

「いじめを除く友人関係をめぐる問題(27.3%)」

・『無気力』傾向：「家庭に係る状況(42.2%)、学業の不振(28.2%)」

・『学校における人間関係』に課題を抱えている：

「いじめを除く友人関係をめぐる問題(70.6%)」

・『あそび・非行』の傾向：「家庭に係る状況(41.5%)」

「学校のきまり等をめぐる問題(32.6%)」

不登校の要因については学校の先生方のご判断ですから、その通りであるかどうかは一概には言えませんけれども、不安の傾向だったり、無気力であったり、学校における人間関係だったり、非行傾向だったりというまとめ方をしておられます。家庭環境の影響で不安が約 30%、いじめを除いた友人関係が 27%、家庭環境の影響で無気力のが 42%、学業不振で無気力が 28%、学校における人間関係では、友人関係に関わる問題 70%がを占めています。

す。そういうことですね。

(2)高等学校の長期欠席(不登校等)の状況

高等学校における不登校生徒数は 48,579 人(前年度49,563 人)

不登校生徒の割合 1.5%(前年度1.5%)

① 高等学校における長期欠席者数:79,425 人(前年度79,357 人)

※不登校生徒数 48,579 人(前年度49,563 人)

在籍者数に占める割合は1.5%(前年度1.5%)

不登校生徒のうち、

- ・90 日以上欠席している者:11,151 人 不登校生徒に占める割合は23.0%
- ・出席日数が10 日以下の者: 2,253 人 不登校生徒に占める割合は 4.6%
- ・出席日数が 0 日の者 : 829 人 不登校生徒に占める割合は 1.7%。
- ・不登校生徒のうち中途退学に至った者 12,777 人(前年度13,495 人)
- ・不登校生徒のうち原級留置となった者 3,678 人(前年度3,800 人)

高校の不登校の数は 48579 人。小・中合計よりは随分少なくなっています。高校の場合は、義務教育ではありませんから、留年されるより多い 1 万 2 千人の方が中途退学されるということになっています。

この西濃学園さんにおいても、小・中のいろんな苦悩を通して、ここに現在籍を置いておられる生徒さんも多いと思っています。

※不登校の要因を「本人に係る要因」で見ると、

・『無気力』傾向:学業の不振(25.7%)

入学, 転編入学, 進級時の不適応(15.4%)

・『不安』の傾向:「進路に係る不安(20.6%)」「学業の不振(18.9%)」

・『学校における人間関係』に課題を抱えている:

「いじめを除く友人関係をめぐる問題(66.4%)」

・『あそび・非行』の傾向:「学業の不振(24.8%)」

「学校のきまり等をめぐる問題(17.6%)」

高校の不登校の要因ですけれども、そんなに小・中と大きく異なるわけではありません。無

気力傾向でいえば学業のことでしょうし、進路の、将来のことですね。学校の人間関係では、友人関係が 66%ということです。家庭の要因が高校になってきますとそんなに表には出てきませんが、小・中のいろんな苦悩が継続して、高校の不登校のこの状況が現れるということでございます。

いじめ認知件数

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度
小学校	60,897	48,896	40,807	34,766	36,909	33,124	117,384	118,748	122,734	151,692	237,921
中学校	51,310	43,505	36,795	32,111	33,323	30,749	63,634	55,248	52,971	59,502	71,309
高校	12,307	8,355	6,737	5,642	7,018	6,020	16,274	11,039	11,404	12,664	12,874
特支学校	384	341	309	259	380	338	817	768	963	1,274	1,704
合計	124,898	101,097	84,648	72,778	77,630	70,231	198,109	185,803	188,072	225,132	323,808

① 小学校でのいじめの増加の背景は？

② 社会全体で考えるべきことが、顕在化していないか？

いじめの認知(発生)率の推移(1,000人当たりの認知件数)

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度
小学校	8.5	6.9	5.7	4.9	5.3	4.8	17.4	17.8	18.6	23.2	36.6
中学校	14.2	12	10.2	8.9	9.4	8.6	17.8	15.6	15	17.1	20.8
高校	3.5	2.5	2	1.7	2.1	1.8	4.8	3.1	3.2	3.6	3.7
特支校	3.7	3.2	2.8	2.2	3.1	2.7	6.4	5.9	7.3	9.4	12.4
合計	8.7	7.1	6	5.1	5.5	5	14.3	13.4	13.7	16.5	23.9

(注1)平成18年度からは国私立学校を含める。

(注2)平成6年度及び平成18年度に調査方法等を改めている。

(注3)平成17年度までは発生件数、平成18年度からは認知件数。

(注4)平成25年度からは高等学校に通信制課程を含める。

次は、いじめです。認知件数は、小学校で 27 年度は約 15 万件、28 年度は約 23 万件で約 8 万件増えています。だいたい全国で約 2 万校の小学校がありますから、全部の小学校で平均 10 件以上のいじめが認知され、急速に増加しているということです。そういうことが小学校で起きています。中学校でも約 6 万件から 7 万件に増えています。高校はほぼ現状維持ということです。

割合では、1000人あたりで小学生は36.6人、前年度は23.2人。中学生は20.8人で、平成24年度あたりを境に25年度からひっくり返って、中学校よりも小学校の方にいじめが増えてきています。そうした実情が今日あるということを申し上げておきます。

いじめはもちろんいけないことです、いじめの加害者の子を被害者という言い方は変かもしれませんが、いじめでしか自分の内面を表現できないという叫びが聞こえます。いじめている子がただ悪いということで社会が看過していくわけにはいきません。被害者は言うまでもなく加害者も含め、いじめを通して、私たちが投げかけられたボールをどう受け止めていくかという課題があるのです。これだけ多くの不登校と同時にいじめという問題があるということが実情です。

学校管理下での暴力行為

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度
小学校	3,494	4,807	5,996	6,600	6,579	6,646	7,542	10,078	10,609	15,870	21,611
中学校	27,540	33,525	39,161	39,382	38,705	35,411	34,528	36,869	32,986	31,274	28,690
高校	8,985	9,603	9,221	8,926	9,010	8,312	8,195	7,280	6,392	6,111	5,964
合計	40,019	47,935	54,378	54,908	54,294	50,369	50,265	54,227	49,987	53,255	56,265

(注1)平成9年度からは公立小学校、平成18年度からは国私立学校も調査。

(注2)平成25年度からは高等学校に通信制課程を含める。

学校の管理下における暴力行為発生率の推移 (1,000人当たりの暴力行為発生件数)

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度
小学校	0.5	0.7	0.8	0.9	0.9	1	1.1	1.5	1.6	2.4	3.3
中学校	7.6	9.3	10.9	10.9	10.8	9.9	9.7	10.4	9.4	9	8.4
高校	2.6	2.8	2.7	2.7	2.7	2.5	2.4	2.1	1.8	1.7	1.7
合計	2.8	3.4	3.9	3.9	3.9	3.6	3.7	3.9	3.7	3.9	4.2

それから学校管理下の暴力行為ですが、多くは友達同士の人に対する暴力行為です。これもですね、小学校が大変です。平成28年度小学校で21000件、中学校で28000件ですが、

小学校は 6000 件ほど増えて、中学校は減ってきています。10 年前と比べると、小学校は 3400 件から 26000 件と約 6 倍に増えています。中学校は 27000 件が 28000 件とほぼ横ばいです。小学生に何が起きてきているのでしょうか。家庭環境とか、社会の在り様とか、それらの問題を、私たちが子どもから投げかけられているのです。教育に関わる者が、家庭では家庭教育者の親という立場で、学校では教師という立場で、どんなボールを子どもたちから投げかけられているのでしょうか。何を気づいていくべきでしょうか。全国統計から問われている気がいたします。

— II 予防的カウンセリングということ —

予防的カウンセリングということ

※身近な家族や教師による感情受容をあえて

予防的カウンセリングと言わなければならない今日の状況

- ①人間は、喜怒哀楽の感情を表出し、それを受容されて緊張が低減する。(笑い、怒り、泣いて安定する)
- ②日常性のなかの**日常性から脱却した状況**で達成される
- ③家庭力・地域力の低下・・・最近の子ども事情
- ④教師による予防的カウンセリングが重要な時代(感情受容)
- ⑤予防的カウンセリングは、すべての子どもに必要
- ⑥聴いて受容してくれる“その人一人”との邂逅

最近、私は多くのところで予防的カウンセリングの重要性を叫んでいます。この予防的カウンセリングという言い方は、ある専門家に言わせると、「カウンセリングは、治療的な状況で専門家が行うものであって、身近な家族や教師が行うものではない。そういう身近な人はカウンセリングができない」ということです。10 年前なら多分そう言われて、「予防的カウンセリングとは、何とずれたこと言っているのだ」と、糾弾されたかも知れません。ところが、今日は、治療的カウンセリングに対して予防的カウンセリングと言わなければいけない状況があるのです。先程の文科省の統計の通り、特に小学生の非常に深刻な不登校・いじめ・暴力事件の数字として現れている状況を考えますと、全部が専門家による治療的なものだけをカウンセリングと言うのではなく、むしろ日常的に予防的に考えていかなければいけない事態にあるということです。そこに重要なことは、従来ならば当たり前になされてあえてカウンセリングと言われなかった、身近な人たちによる傾聴と感情受容です。それを予防的カウンセリングと呼ぼう（予防）というわけです。（場内苦笑）

私が小学生だった約半世紀前、黒板にですね、「根鞭（ねぶち）」って通称言ってましたが、竹の根っこの指し棒がありました。グニャグニャ曲がっていて、とても硬いものでした。そ

れで、「こうですよ」と先生が黒板を指したりしたのですが、時々ですね、秒速何mかのスピードで、私のお尻や背中と強く接触したりしたことがあったわけですよ（会場、笑）。するとその日は、家へ帰ったときに「ちょっと母ちゃん聴いてや。今日、こうこうこう、こうでなあ」とか言って、親にわめき散らした記憶があります。すると「おめえがそんなことやっとなでアカンのやわ!」とか言いながらも、「そらあムカついたなあ」とか、「そらあ腹立ったなあ。痛かったな」と、そう一言言われて、「ああ…スツとした」。家族のだれかに「今日、こんなことがあったよ」と、その日ごとに話せていた記憶があるのです。

そして、私が小・中・高と通学して来た中で、私の知る限り一人も不登校の子はいませんでした。では学校はどうだったか言いますと、今申しましたように、圧力かけられたり、怖いと思える先生だったり、廊下に立たされたりということが頻繁にありました。それでも不登校が少なかったのは何故でしょうか。それはどこの子どもたちも、いわゆる予防的カウンセリングという機能がお家の中にあつたのではないのでしょうか。子どもたちも気楽に「ちょっと母ちゃん聴いて」「父ちゃん聴いて」「じいちゃん聴いて」「今日こうだったよ、ああだったよ」と叫んで、家族に聴いてもらって、感情を受けとめられていたからだと思います。だから、次の日はまた元気に学校に行けたのではないのでしょうか。

私たちは、日常生活の中で皆ストレスを感じているのです。家から一步外に出れば、人目を気にするし、約束もあるし、ルールもあるし、自分の思い通りにはならないわけです。そうすると、ストレスになるのです。だから私たちが目指すのは、ストレスのない社会ではなく、日常生活という集団生活で必ず生じるストレスを解消したり、低減できる健全で健康な社会なのです。そのように考えますと、今日の小学生の子たちに、これだけ急速にいろんな行動が増えてきているのは、統計の出され方の変化も多少はあるかも知れませんが、実際に子どもたちの予防的カウンセリングと呼べる状況が、お家の中で徐々に望ましくないものになりつつあるのではないかと思います。

人間は、喜怒哀楽の感情を持つだけで、生き活きと生きていけるかということ、そうではないのです。例えば、面白いことをただ見聞きすればそれでいいのかということ、そうではないですよ。笑えなければいけないですよ。おもしろいこと見せられて「笑ったら百叩きだ」って言われたらストレスしかないわけですから、笑えるということが大事なのです。悲しい時には、泣けるということが大事です。そうした喜怒哀楽を吐き出して、それを受け止めてもらって、人間は、感情を持つ緊張状態が低減していきます。当たり前のことです。日常生活のどこで、人間はそういう感情を吐き出すかというと、学校の先生にムカついたことを学校の先生の前では言えません。先生のいない、どこにも聞こえていけないところで、「ここなら大丈夫」といえるところで、「母ちゃんあんな、ちょっと聴いて」と吐き出すのです。私は、この状況を日常性から脱却した状況と言っています。人間は、「日常生活の中で、今ここで、この人なら大丈夫という日常性から脱却した状況」で感情を吐き出し、傾聴され感情をされてストレスを低減・解消するのです。

日常性の中での日常性から脱却した状況は、トイレの排泄に例えることができます。誰からも見られず、何を吐き出したかは外へ漏れないのです。日常生活では、そういう憂さをお互いに吐き出し合い、受け止め合っているのではないのでしょうか。だから、一昔前だと赤ちゃうちんの下で、お父さんたちが「ちょっと聴いてくれや」と、当事者たる対象がいなくて職場の上司をボヤき合い、それをチクすることもなかったのです。だから次の日元気に

出勤できたのです。それは子どもも同じだと思います。あえて予防的カウンセリングと言わなければいけない今日は、家庭力とか地域力といえる和や絆が大いに低下していると言えるのではないのでしょうか。

そうすると、今日学校の先生方は大変多忙で、学校業務のスリム化が叫ばれる状況下で、却ってメタボになるようなことをお願いするのですが、学校の先生方に予防的カウンセリングを学校という日常性のなかで、担っていただくことが必要になってきているのです。いかに個別的な関係を持ちながら、一人ひとりの子どもの感情を受容してもらうかということが課題になってきます。今日の教育相談においては、学校の先生方にとって一番重要なことは、予防的カウンセリングということになります。ですから、ケース会議に代表されるように、不登校になった子たちへの処遇だけが教育相談ではなくて、今日は、予防的カウンセリングが学校において重要になっているのです。

それは、クラス全員が常にとという訳ではありませんが、1年通せば全ての子が必ず何回かは「今日聴いてほしい」「今聴いてほしい」と願うことがあるのだと思います。それは、お掃除の時間だったり、廊下ですれ違ったりするときであったり、交換ノートだったり、多忙な先生が個別的に対応してくれることを、子どもたちが期待しているということなのではないのでしょうか。

自分の気持ちを受け止めてくれる「その人一人」がいてくれるということが、人間には必要なのです。その人一人と出会えにくくなり、今日の子どもたちにおいてはピンチになっていることを、先ほどお見せした記述統計は訴えているのではないのでしょうか。だからこそ、予防的カウンセリングが教育の場から抜け落ちてしまうわけにはいかないのです。

Ⅲ 教育にかかわる教師・保護者の心理特性

教師・保護者の心理特性

すべての人間が、影響を受けているということ

- 1 相互性(mutuality)ということ
- 2 ピグマリオン効果とゴーレム効果
- 3 白雪姫コンプレックスとアブラハムコンプレックス
- 4 社会的手抜き(social loafing)
- 5 ハロー効果(halo effect)
- 6 自己奉仕バイアス(self-serving bias)
- 7 心理的リアクタンス(ブーメラン効果)

1 相互性 (mutuality) ということ

予防的カウンセリングの実践に当たって、人間の心には厄介なものがあるのです。それらのいくつかをお話します。今日のタイトルの「共に育ち合う」ということにもあるように、人は「共に育ち合う」存在であるということが、心理学の「人間発達」の大前提です。これを相互性(E. H. エリクソン)といいます。相互性とは、『人間は社会と相互に影響し合って発達する』ということです。だから、親は子を育てるけれども、子も親を育てるということです。赤ちゃんはいつもおんぶや抱っこされているのですが、その育ててもらうことを通して親を育てているのです。教師は児童・生徒を育てていますが、児童・生徒も教師を育てているのです。

子育てしている親御さんが育つチャンスは「親御さんの当てが外れたとき」です。例えば、子どものことは全部分かっているつもりで親御さんのお子さんが、「この子、学校に行けなくなってしまった。どうしてだろう?」「この子が、万引きを。どうしてだろう?」「ちゃんとしつけたはずなのに、何が不満なのだろう?」そう思うと、親御さんの中に湧き上がってくるものがありますよね。おやー?って。おやー?と思いながら親になっていくわけです(会場、笑)。

学校の先生は子どものことを「分かっている」と思いながら、授業を進めておられるのですが、先生が成長できるときは、「気持ちよく授業できたな。みんなよく理解してくれて、私の授業は完璧」と思っているときではありません。「分かっていると思っていたのに、テストをして見たら何も分かっていなかった。どうしてだろう?」というときに、「私の教え方が問題だったのかな?」、不登校になってしまったときに、「私が見落としていたものがあったのかな?」そういうことを通して、児童・生徒が先生を育ててくれるのです。都合よくいっているときではなく、ピンチであるときこそ、チャンスです。どなたかが「チャンスはピンチの顔をしてやってくる」と言っておられます。「まずいな、困ったな」というときこそ、育つチャンスなのです。

私は、うっかり結婚して40年になります(会場、笑)。期待通りの奥さんだったらいいなと思います。ただいま、と帰ってきて、「お疲れさまでした。お風呂になさいますか? ごはんになさいますか?」と訊いてくれたらいいなと思うのですが、そんなことは一度もありません(会場、笑)。裏切られっぱなしではありますが、思い通りの奥さんだったら、私は思い上がったとんでもない夫になっていたかもしれません。思いが潰れることがなかったら、当てが外れなかったら私は、妻の心に配慮できない夫のままだったかも知れません。真面目に私は、悪妻は夫を育てると思っています。

2 ピグマリオン効果とゴーレム効果

ピグマリオン効果は、教師の期待効果と言われます。人間は、期待されていると思うと、モチベーションが上がり成績が向上するということです。だから、教師は児童・生徒に期待して教育実践しなさいということです。ならば、すべての児童・生徒に期待できるかということが問題ですよね。今、冬季オリンピックが開催されていますが、オリンピックに出場している選手にはコーチがついておられると思います。コーチが100人の選手を指導していたとして、その中の一人だけに期待をして、その一人が金メダルを取ったら、そのコーチは名コーチと言われます。でも、他の99人の選手にとっては、まったくダメなコーチかもし

れません。全員に期待できるのかというと難しいものです。

では、学校の先生はどうでしょうか。学校の先生は優秀だと思われる生徒数人を期待していればいいのかというと、そうではありません。教室の 40 人全員に期待して、その結果、全員のモチベーションが上がり成績が向上することが、ピグマリオン効果ということです。ゼミ生のなかでも全員を期待するのは、なかなか難しいものです。裏切られて、裏切られて、それでも期待できるかということ、残念ながら人間は「だめだこいつは」と思えてくるのです。内から湧き上がってくるのです。それがゴーレム効果です。ゴーレムとは、ユダヤの泥人形という意味です。見離されると、「どうせ俺・私はダメだから」と意欲が低下し、やる気がなくなり結果的に成績が低下します。これがゴーレム効果です。

愛知県の中央児童相談所で大学院の頃、心理判定のお手伝いをしていたことがあります。13 歳以下の子どものいわゆる触法事例の心理判定や面接の仕事をしていました。たくさんの小・中学生の話を聴いて、彼らの訴えの多くはゴーレム効果だと実感しました。「勉強したって、おまえはダメだという目でしか先生が見てくれない」「先生がどれだけ頑張っても、成績が上がらないのは、おまえの能力が低いからダメだ」と言われ続けてきた子たちが、やる気を無くし、彼らが仲間を作って非行に走ったのは、必然的な動きだったと思います。

この二つの効果を頭で理解するのは簡単です。でも、私たちは全ての子に、本当に期待を持って接していけるのでしょうか。実践することは、きわめて難しいと思います。人間はずるいと思うのですが、期待に応えてくれそうな子には期待して、期待に応えてくれそうもない子は見捨てるのです。期待して裏切られ、自分が傷つくことから自分を守るために、あらかじめ期待しないのかも知れません。それが本能なのでしょう。この怖さを自覚せず、本能のままに「期待していますよ。ピグマリオン効果ですよ」と推し進めていくと、結果的には「えこひいき」になりはしないでしょうか。「私は、そんなことはない」ではなく、全ての人にピグマリオン効果とゴーレム効果は影響しているのですから、期待することの大切さと危なさを自覚した教育実践ができるかどうか、問われているのです。

3 白雪姫コンプレックスとアブラハムコンプレックス

次は、白雪姫コンプレックスとアブラハムコンプレックスです。コンプレックスというと劣等感と思われませんが、心理学でいうコンプレックスは、無意識的な観念複合体を意味して、劣等感ということではありません。白雪姫コンプレックスは、グリム童話の『白雪姫』の原作に由来して 1985 年に精神分析の佐藤紀子さんが名づけました。グリム童話『白雪姫』は何回か書き直されて、日本に入ってきています。日本版では、実母は生まれてくる子の幸せを願い、肌は雪のように白く、可愛い女の子を期待しました。期待通り可愛い女の子が生まれ、白雪姫と名づけました。でも実母はすぐに死んでしまいます。早く死ぬことによって、実母は慈愛に満ちた悲劇のヒロインとして、位置づけられました。王様が再婚して継母が来ました。その継母は、自己愛が強く美女 NO.1 にこだわる悪女で魔女という設定に書き換えられました。やがて白雪姫が成長して、美女 NO.1 を脅かす存在になって、継母が白雪姫を殺害するというストーリーになっています。ところが、原作は「実母」が白雪姫を殺害するストーリーです。継母は出てきていません。もともとグリム兄弟が書きたかったのは、継母ではなく、実母の心の怖さなのです。

皆さんご存じの実母は、継母とは対照的にいい人に描かれています。生まれる前から、肌

は雪のように白くかわいい女の子を期待する愛の塊のような母親でした。その実母の心を、佐藤紀子さんは虐待するお母さんの事例を通して白雪姫コンプレックスと表現しました。より広い概念でいえば、全ての親に共通の思いです。自分にとって都合のいい子を所有したいという、すべての親に共通の無意識的願望、それを白雪姫コンプレックスと申し上げていいと思います。親の愛の源泉は、白雪姫コンプレックスと言えます。ですから、親の愛は要注意なのです。

私の本務校の教育学部の学生に尋ねますと、小・中学生の頃、学習塾、ピアノ教室、水泳教室、そろばん塾、習字教室などのどれかには通っていた学生がほとんどです。では、それらには、自分から通いたくて通わせてもらいましたか？と尋ねると、大半は「行かされた」と回答します。ある学生は、『ピアノ教室に通ってね、上手に発表できたらね、ディズニーランド連れてってあげるね』とか言われて、『じゃあ習うよ、ピアノ行くよ！』と言ったら、『あの時、あなたが行きたいと言ったでしょ』と言われ、辞めたいと言ってもなかなか辞めさせてもらえなかった」と言いました。なぜピアノだった？と考えると、親の思いが先にあったことが多いようです。本当に親が思うその子の幸せの先には、「私にとって都合のいい子」という親の思い実現へのこだわりがありはしないでしょうか。平生は、それが親の愛として、小出しに発揮されているのかも知れません。思春期になって、親子の軋轢からいわゆる問題行動が顕在化してきたとき、その問題を通して親御さんが、一方的な自身の白雪姫コンプレックスに気づかれることは少なくありません。ですから、いわゆる問題行動は、とても大切な訴えなのです。

アブラハムコンプレックスは、お父さんの心を説明する時にしばしば使われます。サルトルという哲学者が、旧約聖書から引用して名付けたものです。子どもが自立していく過程で、お父さんが自分を乗り越えられ、自分の尊厳とか威厳が徐々に脅かされると感じることを意味します。そこから息子とのぶつかり合いが、しばしば生じます。わが子の自立を願いながら、自立に対してブレーキをかけていく親の中のアンビバレンツな感情とも言えます。アブラハムコンプレックスについては、時間の都合でここまでにしておきます。

4 社会的手抜き (social loafing)

それから社会的手抜き、social loafing です。これもすべての人間に存在しています。例えば、最近ほとんどの中学校でなされている合唱ですね。僧籍を持っている私が「がっしょう」と言うと誤解されそうですが(会場、笑)、そっちの合掌ではなくて歌を歌う合唱です。合唱では、みんな大きな声で歌うのですが、必ず口パクやってる子が、何名かいるのではありませんか。集団での合唱では、私が声出さなくても誰かが歌うだろうと、手抜きをすることが生じやすいのです。運動会の綱引きでは、自分一人が頑張らなくても、誰かが引っ張るから手抜きしてもいいだろうと、一人でやるときよりも手を抜くのです。人間のそういう心理特性を social loafing、M. リンゲルマンが言っていますからリンゲルマン効果ともフリーライダー効果(ただ乗り効果)とも言います。そういう傾向が人間には必ずあるのです。ですから、「教室の掃除は、手抜いたらダメだぞ」と言いますが、自分の部屋を一人で掃除する時よりも手を抜きがちです。「いじめを見て見ぬふりする傍観は罪ですよ」と言いますが、「自分が言わなくても誰か言うだろう。自分がチクったと言われたくない」と、見て見ぬふりしようという心が人間は働くのです。そういう心があるということを知ったうえで、一人

ひとりの子どもたちに働きかけていかなければなりません。例えば、田舎道で、揖斐川町の道とは言いませんけど（会場、笑）、田舎道で、誰かが道でうずくまるところを一人の人が通りかかるとしますと、ほぼ10人が10人声をかけます、「どうされました？大丈夫ですか？」と。ところが東京渋谷の大都会の歩道でうずくまっていて、10人が10人、全員声かけるかという、10人に1人が声をかければいいところで、10人のうち9人は見て見ぬふりして通過してしまいます。人が沢山居れば居るほど、見て見ぬふりするのです。人間のこの本性が social loafing です。人間というのは厄介なものなのです。

5 ハロー効果 (halo effect)

それからハロー効果ですね。halo effect と言います。ヘイローイフェクトは、光背効果、後光効果とも言います。仏さんの後ろにある後光が halo(ヘイロー)です。私たちが写真を撮るときの逆光がそうです。被写体の後ろに太陽があって、カメラが太陽に向かって被写体を撮ることを逆光と言いますね。うまく撮れません。後ろの光が明るすぎると、肝心の目の前の人が暗くなるということです。学校の先生は、ご経験おありだと思います。「あなたはあの子の弟かね、妹かね」ということ。初めて会った子でも、記憶のある「あの子の弟か、妹か」と思った瞬間に、その姉や兄の印象だけで、初めて会った子の成績をその印象に基づいてつけられるような気になってしまうことがあるのです。俗にいう先入観とか色眼鏡とかいうことです。そういうことの影響を、人間は必ず受けているのです。目の前のその人自身よりも、その人の背後にある過去の出来事・家族・噂などの影響を強く受けて、目の前のその人を客観的に理解できないことをハロー効果と言います。この効果を消すことはできませんから、影響を受けていることを自覚することがとても大切です。

私たちが実際に臨床の仕事をするときには、この自覚が不可欠です。例えば学校で不登校のお子さんの支援をするとき、担任の先生からも、親さんからも、あるいは周りの人たちからもいろいろな人から様々な情報を得ていきます。そのたびに、その子のイメージが自分の中に出来上がってきます。「最初に聞いたその人からのイメージで、この子はこういう子だ」と思い込んでしまうから危ないぞ」と自覚していないと、その子の姿を絶対間違えてしまいます。情報を聞くと、必ずそれが先入観となって働いてくるのです。「はたしてそうか？先入観で判断していないか？」と常に吟味する必要があります。「この子のことは、よく分かった」と思うとき、この吟味がないと先入観、色眼鏡でその子を見てしまうということになりかねません。

この自覚を忘れて吟味を怠り、この人はこういう人だと思い込んでしまうと、いとも簡単に差別をしてしまうのが人間です。例えば、「あの、前科がある人だよ」ということを聞くと、何か事件めいたことが起きるたびに、「あの人がやったのではないか」と、いとも簡単に疑ってしまうのが人間です。悲しいことですが、こうした心が必ず湧いて来るのが人間です。だから身元調査は、してはいけません。人間が当てにならないからです。そういう情報得てしまえば、その人を見誤るのが人間です。また、こんなご経験ありませんか。何か新聞沙汰になるような事件が起きて成人の容疑者が逮捕され、普通なら実名報道されるのに、実名報道されていない記事を読まれたこと。記事の後ろの方に、この容疑者は精神科に通院中であつたとか、入院の外泊中だったとか書いてあると、その瞬間に、「精神障害だからこの人、事件を起こしたのか」と思い込んでしまいませんか。精神障害によって起きた

かどうかは、これから調べないとまだ分からないのに、こうした情報があるだけで、「精神障害だから事件を起こした」と、精神障害そのものを差別の目で見てしまったりしませんか。自分の判断の危なさを自覚せずに、「自分の判断は大丈夫」と思うところが、もっとも人間の当てにならない点です。私たちは、「一人の人間を客観的に理解できる眼があるのかなあ」と、ハロー効果の危なさを徹底的に自覚することが問われているという気がします。

6 自己奉仕バイアス (self-serving bias)

自己奉仕バイアス(セルフサービングバイアス)は、認知バイアスの一つです。バイアスは、沢山あるのですが、人間にある、一種の思い込みです。セルフサービングバイアスは、事がうまくいったときには、自因自果です。「私が頑張ったからうまくいった」とみんなが思うということです。運動会で僕のチームが勝ったというときは、一人のヒーローをつくってはいけないのです。みんなが「私が頑張ったから」と、絶対そう思っているのです。うまくいかなかったらどう思うかというと、「あいつのせいだよ」「あいつが失敗したから」と人のせいにする他因自果、それが人間の本性です。政治家さんが秘書のせいにするだけではなく、すべての人間の本性は、うまくいけば自因自果、うまくいかなければ他因自果ということを知っていないと、露骨な責任転嫁でもめたり、あるいは、一人のスターを作ることによって、逆に子どもたちがひがんでしまうことになりかねません。

7 心理的リアクタンス (ブーメラン効果)

それからもう一つ、心理的リアクタンスです。ブレイム夫妻が提唱した言葉でブーメラン効果とも言われます。くの字に曲がった狩りの道具で、投げると元へ戻ってくる、あのブーメランです。人間は、説得されるとその説得内容と正反対の気持ちが湧いてくるということです。いわゆる天邪鬼の根性が人間の本性ということです。例えば、自発的にやろうとしている時に、誰かに先にそれを指示されると、やる気をなくしたりすることです。お仕事の中で、そろそろやろうかなと思っている時に上司から先に指示されてしまうと、文科省の偉い人でもやる気無くしたりしませんか。(会場、笑) よくあるのは小学校の夏休みの宿題ですよ。「そろそろ宿題やらないといけいないな」と子どもが思っている時に、親が焦って、「もう宿題やったかね、やらないとダメだろう」と叱ります。すると「せっかくやろうと思っていたのに、お母さんが言うからやる気失くしたわ」ということになります。これが、心理的リアクタンスです。必ず人間には機能しています。大人が「自分が楽になりたい」という気持ちから、子どもに指示してやらせようとすると、子どもの自発性をどんどん潰してしまうことになりかねません。そういう親御さんおられませんかねえ。これが人間の本性だということです。

以上、人間の心理特性のいくつかを申し上げました。子どもたちのいわゆる問題行動を、子どもから大人への訴え、叫びと受け止めるとき、そこに予防的カウンセリングが必要である時代であると申し上げました。この予防的カウンセリングの實の利を挙げていただくには、予防的カウンセリングのカウンセラーである教師や親御さんが、気づいていただいているべき人間の心理特性があるから申し上げました。この危ないとも言える人間の心理特性はすべての人が影響を受け、誰も消すことができませんから、その危なさを自覚していただ

くしかないということです。私自身がカウンセリングを専門としていますので、私自身の臨床経験の中から実感していることを話させていただきました。

ー IV 心理発達に沿った理解と支援 ー

もう一つ重要なことは、子どもの心理発達を理解したうえでの支援ということです。実際に子どもたちは生まれてすぐに小学生・中学生・高校生になる訳ではなく、発達の積み重ねです。私は発達臨床という考え方を大切にしています。子どもが健やかに発達するためには、その発達段階に応じた必要な経験が必ずあるということです。その必要な経験を、健全に、もれなく確実に子どもに提供していくことが発達支援であり、子育て・教育だと思うのです。

学校で不登校など様々な児童・生徒への支援に当たっては、ケース会議で事例検討が為されます。そこではこの子の何が問題なのかという見立て、その問題を克服するための支援目標、そしてその具体的な策を講じる手立ての3本柱が検討されます。その見立ての重要なポイントの一つが心理発達の理解です。どのような環境の中で心理発達上の課題を残しているのかを見立てる必要が、どの子についてもあるわけです。本日は、時間の都合で小学校・中学校・高校に該当する児童期と青年期前半の心理発達課題についてお話します。後ほど、西濃学園さんのご報告をお聴きしますが、そのなかでは、日ごろ西濃学園では、北浦先生始め太田先生や教科担当の先生方が、この心理発達の視点から教育実践してくださっているご報告が為されます。それに先立って、児童期・青年期前半の心理発達について説明させていただきます。

心理発達上の重要な課題

(1)児童期・・・自己肯定感を蓄える時期

①ギャングエイジ 9歳～10歳がピーク コラボレーション
顔見知りによるルールのある仲間遊びが、人生で一番盛んな時期

- ・居場所感、得意の苦手の受容、個性、思いやり
- ・あるがままに自己の存在を受容される経験(居てくれるだけでいい)

②適格さの獲得 ドラえもん評価の獲得 リカバリー

- ・学業、趣味、生活のなかで、できないこと・わからないことが努力して伸びた分を「よくできました」と評価され、「やれば何とかなる」という確信
- ・到達度よりも、伸びた分を認めて褒めること

(1)児童期

私は、教員免許のない人間ですから、学校教育について何も言えないのですが、多くの児童・生徒との心理臨床実践を通して、小学生・児童期の心理発達の課題は、2つに集約出来るのではないかと思います。

① ギャングエイジ

一つは、ギャングエイジと言われるものです。今日、日本中のほとんどの小学校で、平日の午前中、二時間目と三時間目の間に中休みという時間がある、大体 20 分休みになっていると思います。この 20 分の休み時間は、私は、ギャングエイジの保障だと思います。ギャングエイジは、顔見知りによるルールのある仲間遊びが人生で最も盛んな時期といえます。大体、9 歳 10 歳の頃がピークで小学校の 4、5 年生に該当すると思います。この時期に仲間遊びをしないと、後は、発達段階が変わってきますから、仲間遊びをしようと思ったら、60 歳過ぎてグラウンドゴルフやるまでできなくなります。(会場、笑)、中学、高校、ましてや大学の昼休みに、みんながドッチボールや鬼ごっこする姿は見ません。小学校のうちしかないのです。だからこの時期に、一生懸命、仲間遊びする必要性があるのです。ですから小学校の二時間目と三時間目の間に中休みがあるのは、心理発達に応じたことです。

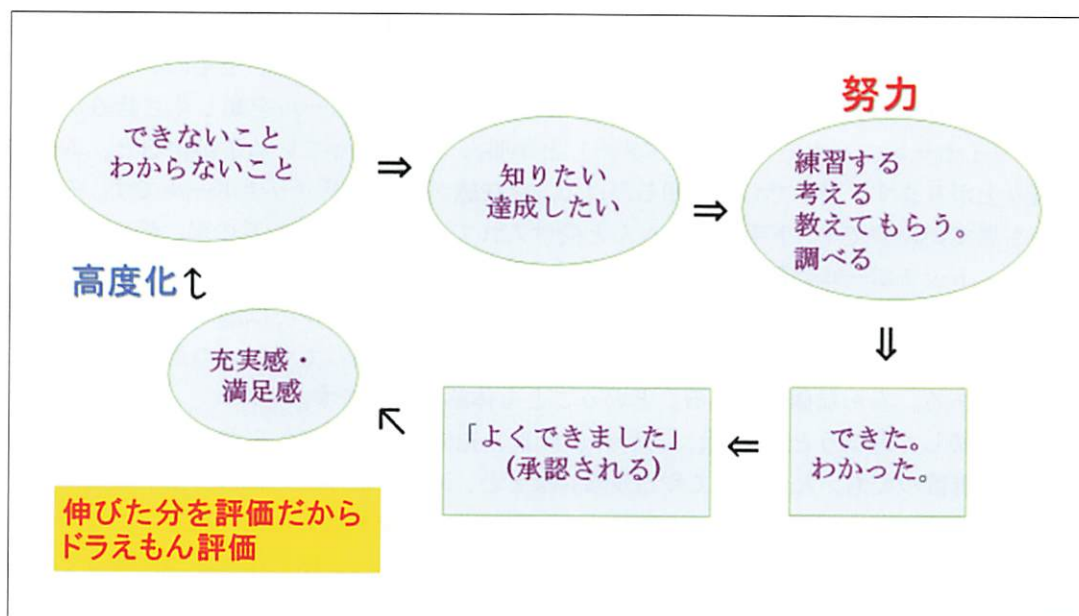
その仲間遊びは、自分がそこに居ることができる居場所感を育んでくれます。居場所感は、役に立つ、立たないということではないのです。小学校の頃の仲間遊びの定番は、ドッチボールだと思います。ドッチボールは、ボールがビュンビュンうなっていて、上手にラリーが続くことが醍醐味かというところではないですね。何がドッチボールを楽しくさせるかというと、「イヤーン、バカー、キャーダメー」とか叫んで逃げ回っている子がいると、ムードが盛り上がります。下手でも逃げ回るだけで、存在感があるのがドッチボールです。そういう子も居ていいのです。下手でもちゃんと受け入れてもらえる場があるのが、ギャングエイジです。ドッチボールに飽きると、「一輪車で鬼ごっこやろうか」となります。ドッチボールは滅茶苦茶上手だった子が、一輪車は下手くそで、ドッチボールでは逃げ回っていた子が、一輪車は上手だったりするのです。遊びを通して、「苦手があってもいいのだ。苦手もあれば得意もある。みんな個性がある」ということを体感するのです。

また、楽しく遊ぼうと思えば、「あいつ、今日、先生に怒られたからなあ。ちょっと荒れても、横着言っても、大目に見てやろうな」などと、楽しく遊ぶためには、相手の気持ちを配慮するようになっていきます。共感性とか、思いやり、友情は、学校の教室の中で育つのではないのです。遊びを通して、子どもと子どもが触れ合って、体と体をぶつけ合って体得されていくものです。このギャングエイジを経験して得られなければいけないものが、自己肯定感です。あるがままに自分の存在を受容されての居場所感、個性だから得意・苦手があるっていいこと、「だから私は、僕は、これでいいのだ」という自己肯定感が得られてくるのです。この自己肯定感が獲得されるから、相手への気遣いや思いやり、共感性が育ってきます。

児童期のギャングエイジは、夏休みや春休みには、地域の中で子どもたちが徒党を組んで遊んでいました。今日は、様々な事情からそれができなくなりましたが、本来そこには地域の人との接触や縦割り集団の遊びもあったのです。後ほど地域とのコラボレーションということを西濃学園さんが発表してください。それぞれの専門の人が力を合わせて一つのことを成し遂げていくことを本来、コラボレーションと言うのですが、地域の人とのつながり、子ども同士のつながり、ギャングエイジの経験等が小学校の頃に十分でなかった子たちに、西濃学園さんでもう一度経験しなおすことによって、子どもたちが自己肯定感を獲得してくれているのではないかと思います。西濃学園では、ギャングエイジの本質がコラボレーションとして実現されていると私は感じています。

② 適格さ

もう一つは、適格さです。適格さとはどういうことであるかといいますと、下の図を見てもらった方がいいのかもしれませんが、学校のことで、学業がもちろん重要です。でも、学業だけではなく趣味でもいいのです。どんなことでもいいのですが、小学生のうちに、できないこと、分からないことができてきます。例えば、算数の割合の問題が分からないとか、野球では、どうしたら正確に速いボールが投げられるとか、ホームランが打てるとか、サッカーでは、どうしたら無回転シュートが蹴れるとか。私たちの頃では、女の子は編み物でしたね。棒で毛糸を引っ掛けてセーターを編んでいくのですが、襟とか袖だとか、あるいは胸にマークなどを入れようとすると難しくて分からないことが出てきます。これらのできないこと、分からないことがとても大切です。今日は時間がないので詳しくは話せませんが、幼児期に「漠然とながら、何でもできる」という自己万能感が獲得されていると、誰



でも、これら分からないこと・できないことが生じると、「知りたい、達成したい」と必ず思います。するとどうしますか。当然努力します。その努力は、練習だったり、教えてもらったり、考えることだったり、調べたり、どんなことでもいいです。何度も何度も繰り返して努力するのです。

そして、「できた、分かった」ということがとても大事です。その達成レベルは百点満点でなくていいのです。実際は何点でもいいのです。点数で言えば、5でも10点でも僅かでもアップしていればいいのです。もともと20点しかできなかった子が30点になることでいいのです。90点だった子が100点になれば勿論いいのです。何点に到達するかということが問題ではなくて、何点伸びたか、伸びた分を認めて大いに褒めてあげることが大事です。「よくできました」と認めてもらって、「僕・私は、やればできるんだ」、「やれば何とかできる」と思えることが、この時期にはとても大切です。この実感をエリクソンは、勤勉性と言い、得られるものは適格さです。この伸びた分を、全ての子に認めてあげることがとても

重要です。伸びたと言えばドラえもんですよ。私は、この適格さを引き出す伸びた分を認める評価を「ドラえもん評価」と言っているのですが、どうですか。小学生の時期は、伸びた分を認めるドラえもん評価が大切ですから、「80 点以上は合格」とか「70 点以下は不合格」というのは、適切ではありません。小学生の時に大事なことは、「何点以上取りなさい」ではなく、何点であっても、伸びた分を「よくできました」と認めてあげることです。

ところが、それは人間には簡単ではありません。人間は、「せめて 60 点取ってよ、80 点取ってよ」と到達度を期待してしまいます。到達度に固執するから、ドラえもん評価をおろそかにしてしまうのです。今開催されているオリンピックが典型例です。やっぱりメダルの色・数にこだわるではありませんか。今日、フィギアスケートの羽生君どうでしょうねと気になるのが、人間の本性だから厄介です。(会場、笑) この本性を自覚して、「児童期は、到達度ではなく、ドラえもん評価が大切」を忘れないことが、私たち大人の使命です。子どもたちの叫びは、このことであると思われませんか。

このドラえもん評価によって、勉強のことでも、趣味のことでも、「やれば何とかできる、やれば何とかなる」ということを小学生の時に経験しておくことは、すべての子に不可欠のことだと思います。これは、その子の一生を支えていく自己肯定感なのです。自分はやれば何とかできる人間だという自己肯定感、この児童期に養われます。後は、その子の持っている能力次第です。100 点の能力のある子は 100 点まで到達するかも知れないし、60 点の能力の子は 60 点しか取れないかも知れません。どこまで到達したかではなく、その子に応じて、その子の伸びた分を私たちがどれだけ認めてあげられるか、問われるのは私たち大人なのです。

このように児童期は、ギャングエイジの経験とドラえもん評価による適格さを獲得して、自己肯定感を体得する発達段階です。この二つの経験による自己肯定感の獲得を、西濃学園さんは学業を通してのリカバリーと表現されているのではないのでしょうか。西濃学園では、「何点取りなさい」ではないと思います、その子なりにやってできたことを、伸びた分を「よくできました」とドラえもん評価されていると思います。自己肯定感の獲得が、重要なポイントではないかと思うことでございます。



(2) 青年期 (自己概念と自我同一性の確立)・・・自己否定感と闘いの時期

(a) 自己概念の形成 (客我の芽生え) : 理想や他者と現実自己を比較

i) 理想と現実のギャップ 理想と現実自己を比較し自己否定

storm & stress(疾風怒濤)

現実を過小評価、理想による自縄自縛? 不安定さ・易怒性

ii) 他者との比較 他者と自己を比較し自己否定するしかない。

いい子が危ない・・・背伸びし、他者からのいい評価にこだわり、緊張を蓄積

相対的評価 ウサギと亀、ピグマリオン効果・ゴーレム効果→やる気喪失

劣者・弱者への見下しによるカタルシス(いじめ・差別等)、第2反抗期

自他共に、人間の存在受容の危機。優れた者への妬み: 自己否定感

(2) 青年期

次は青年期であります。発達加速度現象の今日ですから、中学生というより小学校高学年から青年期の課題と直面しています。

① 自己概念の形成

青年期に入ってきますと、自己概念(self concept)が発達課題になってきます。自分でこうしたいという主我(主体我)だけでなく、人からどう見られるかという世間体とか人目を気にする客我が目覚めてきます。主我と客我が同時に機能するようになると、自分で自分が見えてきますから、自分で自分を評価することが可能になります。青年期になって、自分で自分を評価して見えてくる自己像が自己概念です。自分はどんな人間なのか、どんなレベルなのか、どんな状況を生きているのかということが判断できるようになってきます。

ところが人間は、自分だけ見ても自分が見えないのです。何かと比較しないとわからないのです。そうではないですか。今、私が、「皆さん幸せですか？」とお尋ねしたら、自分だけ見て、幸せかどうかわかりますか？多くの人は、誰かと比べられるのではありませんか？ほとんどの大人はずるいのですよ。「幸せですか？」と尋ねられると、明らかに自分から見て不幸だと思える人と比べます。そして、「私は、あの人と比べると幸せだ」と思ったりするのですね。何かと比べます。ところが純粋な思春期の子たちは、大人のようなずるさはありません。自己概念を何と比較するかというと、一つは理想です。「理想自己」と「現実自己」を比較します。「自分はこうあるべきだ。こうありたい」という理想と現実の自分を比べます。誰でもそうですが、理想と比べると現実の自分は否定したくなります。容貌・能力・適性・境遇などすべてが理想通りという人は誰もいないと思います。自己否定すれば、人間は不安定で、傷つきやすくなります。こうした自己概念による思春期特有の不安定さ、傷つきやすさをS.フォールは、Storm&Stress(疾風怒濤)と表現しています。思春期はみんなそうなのです。現実の自分と理想の自分と比べて、自己否定になるのです。児童期にはな

かった自己否定感が生じてきます。

そしてもう一つは、他者との比較です。周りの友だち、多くの場合は同性の友たちと現実の自分を比べるのです。比べてみるとどうでしょう。クラス 40 人いるとしたら、男女半分で、20 人と比較します。20 人すべての子に対して、「私は全ての領域で、20 人全員に優っている」という子は、世界中探しても一人もいないと思います。いろんな教科を比べて、「私、あの子と比べて、国語と数学はいいんだけど英語は負けるなあ」とか、「勉強はいいんだけど運動能力では負けるなあ」とか、「勉強と運動はいいんだけど、ルックスでは負けるなあ」とかではないですか。小学校の高学年から中学になってくると、クラスの子が、とりわけ同性の子がいるだけで、その子たちがまぶしく見えて自分が苦しく思えてくるのです。

中 1 ギャップといわれる不登校が増えてくる時期は、まさにこの時期で、発達現象から見ると起こるべくして起きているのです。ですから、こうした疾風怒濤の状況の中でも、健気に頑張って勝ち組になろうとする「いい子」は、凄いです、無理をしていますから心配な子でもあります。苦しい時には苦しいと訴えられることは必要です。幼児期から、家でも学校でも一貫していい子だった子は、なおさら心配です。自己概念の芽生えに伴って、程度の差はあれ、全ての子が不安定になるのがこの時期です。

②個人と社会のギャップ

社会の価値観には慣習やしきたりなどによって、個人の個性や尊厳、命より結果や形式を重視する怖さがあります。その最たるものが、ウサギと亀の話です。ウサギと亀というと、たいてい日本人は、どうですか。ほとんどの人は亀になれと教えられたし、子どもたちにも、亀になれと教えていませんか？大人や社会にとって、亀は、とても都合がいいのです。けなげにコツコツ努力して、結果は勝ったのですから。非の打ち所がないわけです。ですからみんな亀になれと言うのですが、本当に亀になるだけでいいのでしょうか。

亀に見落としているものが、ありはしませんか。あの山のふもとまで同じ道を通って、ウサギと亀が競走したのです。どこかでウサギが油断して寝ています。そこを亀は通り過ぎたはずです。その通り過ぎていく亀の気持ちを考えられたことがありますか？どんな気持ちで通り過ぎたと思います？おそらく、「ラッキー、勝てるかも知れない。静かに行こう」と抜き足差し足で、そっと、ライバルが落伍したことをラッキーと思って通り過ぎたと思いませんか。でも、本当に亀は、ひと目見ただけでウサギは眠っているとわかったのでしょうか。もしも心筋梗塞を起こしていたらどうでしょうか。あそこで AED を使っていたら、救急車を呼んでいたら助かったかも知れないけれど、ライバルが落伍することをラッキーと思い、ただひたすら勝ちさえすればいいという亀だったのです。そういう亀になれと私たちは言い聞かせて、この社会で生きているのです。そういう怖さをもった社会に、私たちは呑み込まれているのかも知れません。

こうした社会の中で「いい子」と言われ続け、これに応えなければと頑張る子は、自己否定感まで全部自分に引き受けて、「苦しいよ」と叫べないで、ひたすら耐えようとする子もいるのです。この時期を無理して耐えて、後になって 10 代後半から 20 代になって苦悩を訴えるときには、とても重いものがあります。社会の怖さは、どんなときも明るくはつらつと頑張って努力している子が「いい子」だと見てしまうことだと思います。「苦しいときは、苦しいと叫んだ方がいいのだよ」という価値観があってもいいはずですが、自己否定感は露

骨に表に出させないのです。自己否定感を出すことは、あまり望ましくないというのが社会なのです。賢い子たちほど、「そういうものは、出してはいけない。いい子でいなければいけない」と、自分に蓋をしてしまって、もう、どうにもならなくなってから、訴えてくるということがあったりします。「あるがままの自分で、いい子でなくて、期待に応えなくて、頑張って勝ち組にならなくてもよかったのに」と、もっと早く気づけばよかったのにとと思う子は本当に沢山います。

青年期は、この自己否定感からまず始まり、それを社会に訴えることができることに意味があると思います。それは、社会にとってとても大切だと私は思っています。この青年期の入り口は、児童期の自己肯定感とは対照的なのです。

(b) エゴ・アイデンティティの確立 ライフプランニング

自分が自分になるという実感。定義される自己に気づき、青年期は自己否定から始まる。やがて定義される自己を受容し、それに近づきつつあるという確信が生じてくる。

選択肢の多さ → 人生の主体的選択が極めて難しい現代の日本ということ
一つを選びとり他を捨てる難しさ ⇨ 心理社会的モラトリウムの利用
[高学歴社会]

(c) チャムとの人間関係の深まり (特定の同性の親友との交流)

自他共に無条件の存在受容と絶対的信頼

すなわち 心理的距離ゼロの人間関係の確立

学業成績・学歴という条件・先入観に支配されない友人関係

将来の異性関係への基礎の確立

③ エゴアイデンティティの確立

もう一つ、青年期の心理発達課題にエゴアイデンティティの確立があります。これは、青年期でも少し後半の時期で、大学からそれ以降にあたり、高校はその準備の時期と言えます。エゴアイデンティティは、エリクソンのいう漸成説の青年期の発達課題です。「自分が自分になっていく。定義される自己に主体的に近づいていく確信」と言うことができます。その克服の最初は、「定義される自己」に気づくということです。定義される自己とは、意思を超えた自己であり、受容するしかない自己をいいます。私たちは自分の意思で生きていると言いますが、私たちは、意思を超えた命によって生かされています。自分の思いや意思が先にあって生きているという人はいません。どなたか受精卵だった頃、覚えておられますか？「あれは、母親の子宮だったかな、卵管だったかな」と、そんな人いませんよね(会場、笑)。気がついたら、自分が生まれていたし、生まれてからもそうです。自分の出会った人、どうですか。自分の意思が先で出会った人おられます。小学校の同級生のあの子とこの子は、私の意思で念力で出会ったなんていう人いますか。誰一人として、私たちは自分の意思で出会っていません。人生を決めていく出来事もそうです。みんな都合のいいことだけを予定と

言っています。例えば、3月1日、大垣のどここの交差点で交通事故、3か月に入院なんて、予定している人いますか。(会場、笑)都合の悪いことは、何も書いていません。健康も容貌も能力も境遇もすべてそうです。

自分というのは、自分の意思によって成り立つのではなくて、定義される自己という大前提があるのです。それに気づき、向き合って、受容してその可能な範囲内で自分の生き方を見つけていくのが、エゴアイデンティティの確立ということです。この定義される自己に気づくのも青年期の入り口です。児童期には気づけなかった自分の定義される自己は、必ず何かしら受け入れ難い事実を含んでいるのではないのでしょうか。思春期は、自己概念と同時に、この点においても自己否定感に襲われます。自分の思い通りではない身の事実気づき、自己否定し、苦しみながら少しずつ定義される自己と向き合い、受容するようになるのです。まさに Storm&Stress です。10代後半から20代になって、やっと定義される自己を受容し、その可能な範囲内での生き方を見つけてくるのです。

このエゴアイデンティティの確立にあたって、先ほど申しました児童期の自己肯定感、ギャングエイジと適格さによって得られる自己肯定感が十分にある子は、青年期において、自己否定感に遭遇しても、心の安定は崩れにくいのではないかと思います。青年期の自己否定感では全ての子に必ず生じますが、小学校時代の十分な自己肯定感があれば、その自己否定感では小さいような気がします。スクリーンにありますように、児童期の自己肯定感から思春期の自己否定感を引いたときに、それがプラスになるのか、マイナスになるのかで青年期の適応状況は異なるのではないかと思います。発達臨床という視点で見てみると、そんなことが見えてきます。

④ 心理社会的モラトリアム

定義される自己を受容して、可能な範囲内で生きる道を見つけていくライフプランニングがエゴアイデンティティの確立です。ところが、現代社会は厄介です。例えば、江戸時代の20歳の青年と21世紀の20歳の青年と比べて、どちらがエゴアイデンティティの確立が大変でしょうか。文句なしに現代の青年の方が大変です。なぜなら、江戸時代には、定義される自己を受容すれば、職業選択の余地は一つしかしなかったのですから、即エゴアイデンティティは確立できました。捨てるものは、何もありませんでした。ところが現代は、結婚でも職業でも、沢山選択肢があります。その中で、たった一つを選んで他をすべて捨てることが、とても難しいのです。一つ選択したものが、他の捨てた全てのものと同等かどうかと考えると、一つを選択して人生を決定することに躊躇してしまうことになります。当然、中卒の15歳よりも高卒の18歳、高卒よりも大卒の22歳、大卒よりも大学院の24歳で具体的進路を決定する傾向が出てきます。このように、高校、大学、大学院などの学歴を利用してエゴアイデンティティの確立を後延ばしすることを心理社会的モラトリアムといいます。現代が高学歴社会といわれるのは、心理社会的モラトリアムの意味もあるのです。こうした自己肯定感と自己否定感のしぎ合いの中から、将来の生き方をどのように見つけていくかを、西濃学園さんは、ライフ・プランニングと称して取り組んでおられます。青年期の中学生・高校生においては、やがて出会っていくべき重要な課題であります。

☆中1ギャップ:

ギャングエイジからチャムエイジへの展開の困難さ、自己否定感

(d)発達特性の多様化

パニック障害、社交不安障害、アパシー、引き込み、リストカット、
長欠、摂食障害、発達障害、非行、
心理的距離の取れなさ、Virtualなネットゲームの流行 等

☆高1ドロップ:高1での中退者の多さ、モラトリアムの見つけにくさ

自己肯定感(児童期)－自己否定感(青年期初期)
＝＋(適応)? －(不適応)?

⑤ チャムエイジ

青年は、自己概念や定義される自己による自己否定感をどのように低減していくかと言いますと、特定の同性の親友との交流によるところが大きいのです。この特定の同性の親友をチャムと言います。先ほど申しましたように、中学、高校になってくると、ギャングエイジではなくなります。いわゆる、群れる、仲のいい友人が数人固まる、それがチャムです。特定の同性の親友は、「ブルータス、お前もか」なのです。「僕だけではなかった、私だけではなかった、あなたも同じように悩んでいたのか。あなたも、自信なかったのか。私も一緒だった」、というところから始まって、親が一番、家族が一番心理的距離が近いと思っていたけれど、家族以上に心理的距離が近い、心理的距離ゼロの人間関係ができてきます。それが、チャムエイジです。そこでは、秘密はなく、全てをさらけ出し、先ほどの予防的カウンセリングの機能も果たしている人間関係です。全部吐き出して、自分と同じことを悩み、同じ姿を呈していると実感できます。そこでは安心して、自分のあるがままをさらけ出せます。自分自身の存在を支えてくれるチャムが、自己否定から自己肯定へ向きを変えてくれるのだと思います。この経験が、特定の異性との関わりへの大きな力になります。異性とうまく関われないなあと思悩む人は、悩む前に同性とのチャムエイジを満喫することが必要です。

現代社会が、ギャングエイジからチャムエイジへ順調に展開できているかという、スマホやゲーム等の存在が、随分邪魔をしている気がします。子どもたちが、心と体をぶつけ合ってギャングエイジの人間関係を作り、青年期のチャム体験ができているかという、とても危なく感じます。この体験の弱さから、「大人になったときに、人間関係が破綻しなければいいが」という不安は、拭い去れません

もう時間が来たので終わらせてもらいますが、西濃学園さんにおかれましては、子どもたちの心理発達の姿をしっかりと見据えた上で、今までに十分ではなかった経験をこの西濃学園で補って、社会に送り出していこうとしてくださっていることに頭が下がります。心理発達の理論に基づいて実践をし、生徒も教師もお互いが育ち合っている西濃学園であることを、これからの発表を通して確かめさせていただこうと思います。

本当につまらない話であったかと思いますが、ご清聴いただいたことに敬意と感謝を申し上げて終わらせていただきます。ありがとうございました。お疲れでございました。(会場、大拍手)

シンポジウム録

平林 それではシンポジウムの方、始めさせていただきます。まず私の方から、コメントーターの先生方の紹介をさせていただきます。向かって右側の方から、本日、コメントーターとしてご参加していただいております、文部科学省初等中等教育局松林高樹様。

松林氏 文部科学省の松林でございます。本日はお招きいただき、ありがとうございます。本日はよろしくお願いいたします。

平林 同じく、文部科学省初等中等教育局松嶋佑佳様。

松嶋氏 松島でございます。よろしくお願いいたします。

平林 先ほど、ご講演いただきました、岐阜聖徳学園大学、譲西賢先生。

譲先生 よろしくお願いします。

平林 公益財団法人博報児童教育振興会、三松里江様。

三松氏 よろしくお願いします。

平林 本学園学園長、北浦茂。

学園長 よろしくお願いします。

平林 続きまして、左側の方、本日、この後、シンポジウムの司会をしていただきます、元文教大学教育学部教授、嶋野道弘先生。

嶋野先生 嶋野です。どうぞよろしくお願いいたします。

平林 そして、この後、報告をします、本学園、コラボレイト担当、真嶋良輔。

真嶋 よろしくお願いします。

平林 同じく、リカバリー担当、中橋栄吾。

中橋 よろしくお願いします。

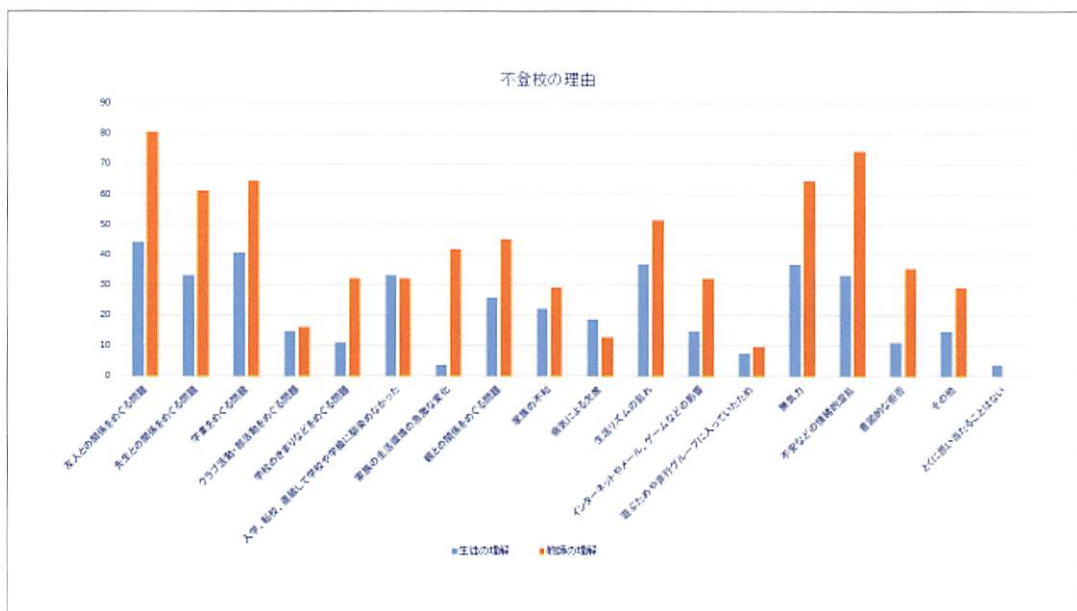
平林 そして、最後に、ライフ・プランニング担当、太田宣子。

太田 よろしくお願ひします。

平林 以上でございます。それでは、この後、司会の方、嶋野先生にお願いをしたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

嶋野先生 それでは、これから、シンポジウムの方に入りたいと思います。が、その前に、西濃学園の方から、三つの授業について、報告をいただきたいと思います。すでに、お話が出ていますが、西濃学園、コラボレイト、リカバリー、ライフ・プランニングという新しい授業を作っているわけですが、いったいどういう授業なのか、今年一年、始めて一年たったところだと思いますが、これについて、報告をしていただきたいと思います。じゃあ、よろしくお願ひします。

太田 まず、どうして、「コラボレイト」「リカバリー」「ライフ・プランニング」という教科を設置するに至ったのかをご説明します。



これは、お手元のパンフレットにも掲載しましたが、西濃学園中学校の生徒の「不登校となった理由」あるいは教師から見た生徒の「不登校となった理由」を示したグラフです。青い棒線は、回答者 28 名の生徒のうち、自分が不登校となった理由として生徒自身が当てはまると回答した割合です。全生徒は 33 名いますが、回答を拒否したり実施できなかった生徒もあり、ここには含まれておりません。赤い棒線は、三名の担任とスクールカウンセラーが、生徒が不登校となった理由として当てはまっている、とした割合です。教師の検討は全生徒に対して行いました。

- ・不登校の理由は、**生徒の理解と教師の理解ではズレ**がある。
- ・**教師の理解と一致**している生徒の方が成長している印象。
- ・不登校の理由は単一、単純ではなく、**いくつかの理由が絡み合っ**ている。
- ・生徒の理解と教師の理解ではズレもあるが、**傾向は一致**している。
- ・**友だちとの人間関係**を理由として挙げた割合が最も大きい。
- ・次いで、**情緒的混乱、無気力**。
- ・次いで、**学業をめぐる問題**。
- ・情緒的混乱、無気力といった精神状態は、不適応に付随しやすい精神状態なのだろう。
- ・**人間関係の問題、学業をめぐる問題**の割合はとても大きい。
⇒**コラボレイト、リカバリー、ライフ・プランニングの設置へ**。

このグラフから、不登校の理由は、生徒本人の理解と教師の理解では、ズレがあることがわかります。

ただし、教師の印象としては、不登校の理由において一致度の大きい生徒は、成長を感じられる生徒だ、という印象があります。あくまでも印象の話ですが、一致度が高くなるということは、生徒のなかに、他者と共有できる世界が広がってきていることで、それが成長の印象とつながるのかな、という気がしています。

また、西濃学園の生徒たちは、不登校の理由として複数回答をしている生徒がほとんどでした。単一、単独の理由で不登校になるというよりは、いくつかの理由が絡み合っ不登校となるのではないかということも想像されました。たとえば、「いじめ」という単一の理由で不登校になるというより、発達特性を持っていて、そのため学校で、ときには家庭でもトラブルを繰り返しやすく、二次障害として愛着の問題が引き起こされたり、また、不登校という不適応を起こしている、というように問題が複雑化したり、ときには悪循環が引き起こされていることが多いのではないかと、思いました。この悪循環を断つことも、西濃学園の重要な役割の一つだと、考えています。

そして、ズレもありますが、生徒と教師で、傾向は一致しています。「友だちとの人間関係」という理由が、不登校の理由として最も挙げられた理由です。次いで、「情緒的混乱」と「無気力」です。次いで、「学業をめぐる問題」です。

「情緒的混乱」「無気力」といった精神状態は、不適応に付随しやすい精神状態なので、どの問題が起こっていても、生じてくるものなのでしょう。

そう考えると、不登校の理由として、「人間関係の問題」「学業をめぐる問題」の割合がとても大きいことが見えてくると思います。

そこで、西濃学園では、この「人間関係の問題」「学業をめぐる問題」に取り組むために「コラボレイト」「リカバリー」「ライフ・プランニング」の科目を設置しました。

それでは、「コラボレイト」について、真嶋より発表していきます。

コラボレイト実践報告

真嶋良輔

真嶋 今からコラボレイトの実践報告を始めさせていただきます。よろしくお願いします。

報告の流れ

- 1 コラボレイト、地域学習の概要
- 2 今年度のテーマ
- 3 活動内容、生徒の実態
- 4 アンケート
- 5 成果と課題

報告の流れとしては、御覧の流れで報告をさせていただきたいと思います。

コラボレイトとは

現在自分たちが住んでいる地域を入り口として、地域の方と交流をすることで、社会に対する見方や考え方を学ぶことを目的として開設

全学年、年間105時間

[地域活動]



[地域学習]



[キャリア教育]



まずコラボレイトの概要をご説明させていただきます。コラボレイトとは、現在自分が住んでいる地域を入り口として、地域の方と交流をすることで社会に対する見方や考え方を学ぶことを目的として開設しました。コラボレイトは基本、全学年で行うものとし、年間 105 時間をコラボレイトの時間として設けました（その他放課後も使用）。活動内容としては、地域活動（イビデンの森の植林、清掃活動など）、地域学習、キャリア教育（保育実習など）という活動内容になります。今回の発表ではその中でも地域学習に関する内容を発表させていただきます。

地域学習のねらいと概要

[開設のねらい]

村落共同体の生活

→ 学び、ともに行動し生活する

[概要]

- ①年度ごとに藤橋地域に関するテーマを決める
- ②テーマに沿い、地域交流や体験活動を行い学ぶ

・週:「1時間」 年間:「35時間」

・全学年、全教員で取り組む

・地域にも協力していただく

まず地域学習のねらいと概要としまして、開設のねらいの部分からいきますと、日常生活から近隣住民と助け合う「村落共同体の生活」が人々のつながりの原点だと考えまして、その精神を不登校生徒が学び、ともに行動し生活することで、再び社会の中に入ることができるようにと考え開設しました。

そして概要としましては、まずその年度ごとに藤橋地域に関して学ぶテーマを決めます。そこからそのテーマに関することを地域交流や体験活動を行いながら学びます。地域学習は基本的に週に1時間、年間35時間行うものとしておりますが、そのほかの時間も使いながら実施しております。そして地域の方々にも協力をしていただきながら実施しております。

今年度のテーマ:「藤橋の祭り」

- ・9月第2土曜(9日)
- ・東、西に分かれて実施
(神輿のルートも違う)
- ・祭り後に民謡、神楽を
奉納



今年度の地域学習のテーマは「藤橋の祭り」に設定しました。理由としましては藤橋地域の伝統文化の触れさせ、さらに地域交流を図ることができると考え設定しました。藤橋のお祭りは9月の第二土曜日に行われています。藤橋の祭りは東横山、西横山に分かれて実施されるので、毎年生徒を学年ごとで分けてそれぞれ参加させてもらっています。今年度はこのテーマに沿いながら活動を行いました。

[現地調査]



[聞き取り調査]



[体験活動]



地域交流や地域の仕事、文化に触れる

神輿を担いだことがない
祭りに参加したことがない



地域の行事自体
出たことがない

不登校生徒の世界が広がる

藤橋の祭りを学ぶ中で、地域の神社に出向いての現地調査や地域の人に対しての聞き取り調査、また神社の境内の清掃や、祭りへの参加、民謡の体験など、地域の方との交流や藤橋地域の仕事、文化に触れる機会を多く設けました。

理由としましては、西濃学園に來ている生徒の中には、学園に來るまで神輿を担いだことがなかった生徒や地元の祭りに参加したことがない生徒、そもそも地元では地域交流が無いため地域の行事自体出たことがない生徒など、地域と関わってこなかった生徒が多くみられます。

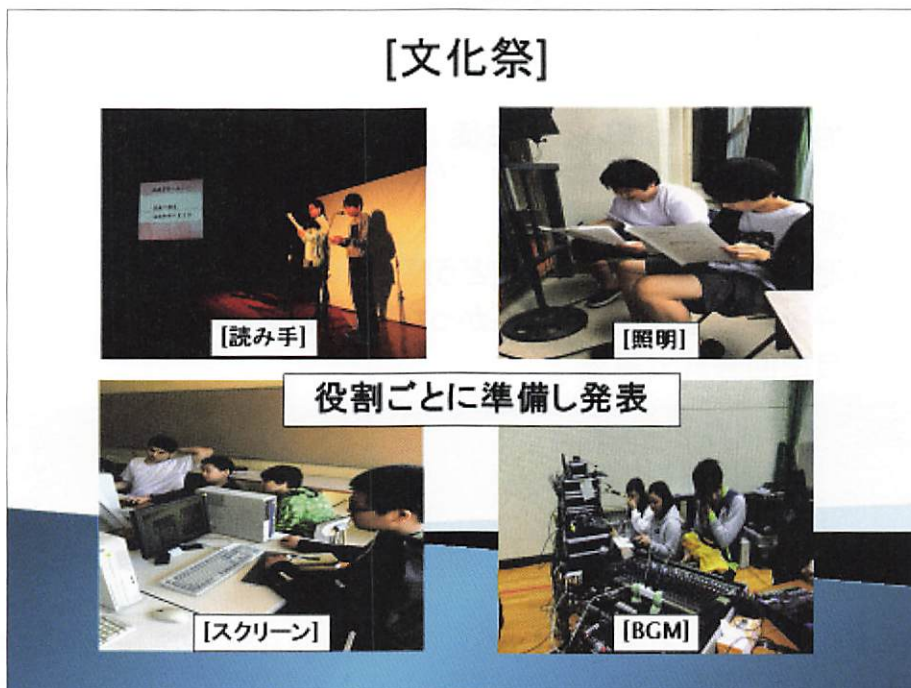
そのためこういった地域の仕事や文化に触れるなどの社会体験を多く積まることにより、地域社会の成り立ちを学び、不登校生徒の世界を広げ、社会に出たとき生きやすくなると考え、こういった活動の時間を多く設けました。



今年度の地域学習では学習形態として協働学習の形をとり、班での話し合いや作業の時間を多く設けました。一班7人構成の班を4班設け、その中から一人リーダーに任命し、毎授業の課題に対して班で取り組んでももらいました。

西濃学園に來ている生徒の実態として、自己のイメージが弱く自信がない生徒が多くみられます。さらにカウンセラーの太田の報告でもありましたように、対人関係のもつれから不登校になった生徒が多くいます。そのため人とのぶつかり合いを回避し諦める傾向があります。将来の社会参加を見据えると、そのままだと再び殻に閉じこもり社会に入れなくなる可能性がありますので、あえて生徒たちが苦手な人とのぶつかり合いの場を設けました。

話し合いの中で、相手の感情や意図を汲み取りながらコミュニケーションを取る、そういった体験を重ねることで対人関係を築く能力が養え、積極的に社会の輪の中に入っていけると考え、今年度は協働学習の形をとりました。



これらの活動を通して藤橋の祭りについて学んできましたが、学んだ内容を地域と合同で行う文化祭で発表しました。今年度は役割ごとに生徒主体で準備をさせました。発表を成功させるという明確な目標があったり、仕事の責任感から、生徒たちは苦手ながらも周りと協力し準備を進めたり、周りの生徒と支えあったりするなど、他者と積極的に関わろうとする姿勢が見えました。

アンケート調査

[調査対象]

- ・中学1～3年生
- ・地域学習に出ている全生徒

[調査項目]

- ・地域交流、文化に触れてどう感じたのか？
- ・協働学習を行ってみて良かったこと、苦労したこと
- ・自由回答式で実施

今年度の活動に対してアンケート調査を行いました。調査対象は中学1～3年生の地域学習に出ている全生徒を対象に実施し、調査項目としては地域交流や文化に触れてどう感じたのか？協働学習を行ってみて良かったこと、苦労したことなど自由回答式で生徒の素直な意見を書いてもらいました。

アンケート結果①

「地域交流、文化に触れて」

- ・地元では地域交流が無いので、新鮮だった
- ・散歩中にも話しかけてくれるようになりうれしい
- ・自分にとって藤橋が思い出の場所になった
- ・祭りのとき地域の一体感を感じた
- ・みんなと力を合わせて祭りに参加できてよかった
- ・地元の祭りには参加しなかったのが楽しかった

地域交流や文化に触れての感想としては、地域交流は新鮮だった、自分にとって藤橋が思い出の場所になった、みんなと力を合わせて祭りに参加できてよかったなど、社会経験を積むことや対人関係が広がることに対して肯定的な意見が多くみられました。

アンケート結果②

「協働学習を行ってみて」

- ・リーダーとしてどうすれば指示が通るのか？など考えながら班をまとめるのがやりがいを感じた
- ・他学年と交流するきっかけになった
- ・ふざけている人がいて、まじめに取り組んでほしかった
- ・班の人数が多くて、一部の人だけが動いていた
- ・班のリーダーに任せきりで申し訳なかった

協働学習を行ってみての感想としては、班をまとめることに対してやりがいを感じた、他学年と交流するきっかけになったなど肯定的な意見がありつつも、まじめに取り組んでいない生徒がいたり、班の中でも一部の生徒だけが動いている班もありました。これらのアンケート結果から地域文化に触れたり、地域交流を図るのは生徒にとって新鮮で楽しいものという認識で行っているのに対して、班での活動にはあまり意欲的ではないことがわかりました。

今年度の成果

地域交流や文化、協働学習を通じて

地域の成り立ち

人の暖かさ

助け合いの生活



地域や他者と積極的に交わる生徒が出てきた

今年度体験活動や協働学習など様々な活動を行ってきましたが、活動を通じて地域の文化や地域社会の成り立ち学び、地域の人々の暖かさを感じ、村落共同体の助け合いの生活を体験する中で、地域や他者と積極的に交わろうとする生徒が出てきました。これは今年度の地域学習の一つの成果だと捉えています。

中学3年の男子の例をあげますと、転入してきた4月当初はほかの地域から来ていることもあり、藤橋地域や学園生に対してとても他人事でしたが、活動を通じて地域を知っていくうちに、自ら地域の観音像まで進んで散策に行くなど意欲的に地域を知ろうとしたり、班のリーダーを支えるようにもなりました。こういった生徒が地元に戻った際にも、地域に対して興味関心を持ち、積極的に関われたら、社会の輪の中に入っていけると思います。

来年度の課題①

班に対して他人事、ぶつかり合いを回避

班の中でリーダー以外に役割を持たせる

進行役

書記

調べる係

まとめ役

生徒一人一人の実態をつかみ班を構成

アンケート結果や授業での生徒の様子から、来年度の課題としましては、班に対して他人事で、ぶつかり合いを回避する生徒が多く見受けられたことです。自分に自信がなく、人間関係のもつれから不登校になってしまった生徒が多くいるので、班での活動に対して消極的で参加しようとしないう生徒が多くいました。そのため班のリーダーや能力のある生徒に負担が掛かってしまう状況が多々ありました。

そういったことから来年度は班の中でリーダー以外にも決まった役割を一人ひとりにあたえてみようと考えています。そこから自分というものを捉え、自信を持ち積極的に班の活動に関われるようになればと考えています。そのためには班構成の段階で、生徒一人ひとりの実態を掴み、班構成を行う必要があると思います。

来年度の課題②

地域の文化を残す

地域の方々と共に

体験

聞き取り



藤橋の伝統
を記録する

そしてもう一つの課題として、地域の文化を残していくことが課題としてあると考えます。地域の方々と共に行う体験活動や聞き取り調査などから学んだ藤橋地域の伝統文化を記録し、残していく必要があると思います。

最後になりますが、不登校生徒の将来の社会参加を支援するために、地域学習では今年度様々な活動を通じて、藤橋の村落共同体の生活を学び、体験してきました。その中で生まれた成果や課題を来年度に活かし、より不登校生徒にとって意義のある時間にしていきたいと考えています。

ご清聴 ありがとうございました

コラボレイトに関しまして、ご質問やご意見がありましたら、お願いいたします。

嶋野先生 じゃあ、なければ、また、後で、お気づきのときに手を挙げていただければ、
と思います。つづいて、リカバリーの報告にいきましょうか。

リカバリーの報告

中橋 栄吾

中橋 それでは、よろしくお願いいたします。リカバリーの報告をさせていただきます。

目次

- 1、リカバリーの概要
- 2、授業例
- 3、生徒アンケートの結果から
- 4、職員アンケートの結果から
- 5、成果と課題
- 6、今後へ向けて

このような流れで発表していきます。よろしくお願いいたします。

リカバリーとは

生徒が学校へいっていなかった時期や学校へ行っても学ぶ意欲が発揮されるに
いたらず、取りこぼした内容について復習
する時間

目標

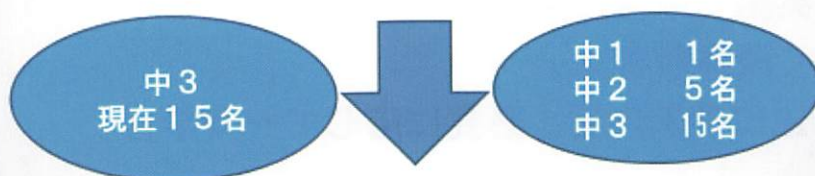
不登校の間に取りこぼした内容を
取り戻し、学力を向上させる。

まず初めに、リカバリーとはどういう授業なのかをご説明します。

リカバリーとは、「生徒が学校へいっていなかった時期や学校へ行っても学ぶ意欲が発揮されるにいたらず、取りこぼした内容について復習する時間」で、目標は「不登校の間に取りこぼした内容を取り戻し、学力を向上させる。」ことです。

リカバリーの必要性

入学時期がバラバラのため、既習事項に大きな差がある。



通常の授業で一斉に学習することが困難

では、リカバリーという授業がなぜ必要なのか、その理由は、本校の生徒は入学時期がバラバラで、既習事項に大きな差があるからです。今年度の中3の生徒数を例にしますと、中3は現在15名いますが、中1では1名、中2で5名、中3で15名というように推移してきました。年度途中に入学してくる生徒も多くいますので、通常の授業で一斉に学習することが困難な場合が多々あります。それを少しでも解消するために、リカバリーという補習の時間を設けることは、生徒にとって重要であると考え、設置しました。

時数、対象教科、授業形態

<時数>

年間35時間（週1コマ、50分）

<対象教科>

国語：漢字（小学校の内容含む）

数学：計算（小学校の内容含む）

英語：単語と文法

<授業形態>

主に個別学習、必要に応じて一斉学習

リカバリーは、週1コマ50分、年間35時間行います。それを国語、数学、英語の3教科に振り分け、主に個別学習で、必要に応じて一斉学習で行っています。

学習内容

赤：国語 青：算数、数学 緑：英語

1年生

1学期	2学期	3学期
漢検8級～6級(小)	分数のかけ算 わり算 速さの計算	単語、文法 (中1)

学習内容についてです。どの生徒も一学期から三学期を通して、国語、数学、英語を学習できるように計画しました。表の文字の赤色は国語、青色は算数、数学、緑色は英語の内容です。

1年生は、一学期は漢検の問題、二学期は算数の計算、3学期は英語の復習をしています。

学習内容			
赤:国語 青:算数、数学 緑:英語			
2年生			
	1学期	2学期	3学期
A	漢検2級(高)	数検4級(中2) 授業の発展内容 岐阜新聞テストの 過去問	文法、読解 (中2)
B	正の数負の数、比 例反比例、1次方 程式	文法(中1後半～)	漢検6級(小)
C	単語、文法 (中1前半)	漢検6級(小)	小学校算数、正の 数負の数、文字式 の計算の復習

2年生は、習熟度別に3クラスに分かれていますが、

Aクラスは漢検2級、数検4級の問題、英語では英文法の発展的な問題など、基礎よりもやや応用的な学習をしています。

Bクラス、Cクラスは、漢検6級の問題、数学は小学校の算数から中1数学の基礎計算、英語は中1の基本単語や基礎英文法を復習しています。

学習内容

赤:国語 青:算数、数学 緑:英語

3年生

1学期	2学期	3学期
単語、文法 計算(筆算～ 因数分解)	単語、文法 図形、関数、 文章題	模試の過去問 模試の過去問

3年生は、リカバリー以外にも毎日放課後に30分間の補習も行っており、補習と合わせて学習しています。受験を見据え、初めは各学期でどの教科も学習できるように計画しましたが、英語と数学の復習の方がニーズが強く、現在は英語と数学だけを行っています。数学では、小学校算数の計算から中学数学の応用、英語では基本単語から文法の応用まで、個々の進度に合わせて学習できるようにしています。

授業(英語科)①

<単語学習>

- ・ 反復練習で暗記
- ・ ゲーム形式で復習
- ・ 学習した単語を用いた簡単な会話



では、どのような授業を行っているのか、英語の授業を例にして紹介させていただきます。

英語では、単語と文法を学習します。単語学習では、反復練習で暗記、ゲーム形式で復習、学習した単語を用いた簡単な会話、という流れで授業を行いました。写真は中2Cクラスでの単語指導です。単語を暗記する際、単語帳などで文字を見て覚えたり、反復練習したりすること自体が苦手な生徒もいます。そういった生徒でも、単語の意味をイメージで覚えたり、ゲーム形式で復習したりすることには取り組めることがあります。また、集中が続かない生徒もいます。そういった場合には、集中が持続できる時間で活動を区切りながら進めることで、授業を最後までやり切れるようにしています。覚えた単語を簡単な会話をして話すことで、定着を目指しました。

授業(英語科)②

<文法学習>

- ・ 中1の範囲から復習
- ・ それぞれのレベルに合わせた個別指導
- ・ 学習した文法を用いたゲームや会話



文法学習では、中1の範囲から順に復習しました。写真は中2Bクラスですが、生徒自身では、どの範囲が抜けているのかが分からなかったり、既習内容でも忘れていたりするところもあるため、どのように進めるかをそれぞれの生徒と相談し、リカバリーできるように進めました。

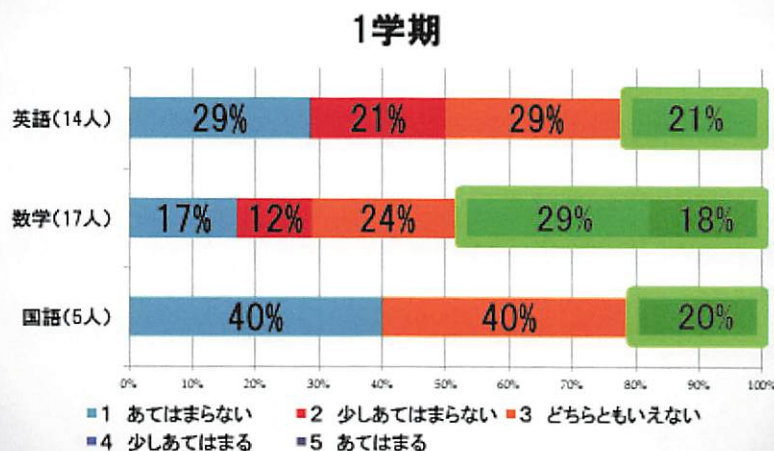
ある程度学習を進めたところで、全員が既習の文法を用いた簡単なゲームや会話を行い、定着を目指しました。

アンケート調査

- 実施時期
1 学期末と 2 学期末
- 調査対象
中学 1 年生～中学 3 年生で継続的に授業に参加していた生徒
- 質問
「リカバリーを受ける前と比べて、その科目が分かるようになりましたか。」

このような授業を各教科で行っていますが、生徒がリカバリーを受けて、実際にどう変わったかをアンケートで調査しました。実施時期は、一学期末と二学期末で、調査対象は中 1～中 3 で継続的にリカバリーに参加していた生徒です。質問は、「リカバリーを受ける前と比べて、その科目が分かるようになりましたか。」というものです。

アンケート結果



一学期末の調査結果は、この通りです。

一学期にリカバリーで英語を受けた生徒は 14 人、数学を受けた生徒は 17 人、国語を受けた生徒は 5 人です。

各教科の回答の割合は、左から順に、「当てはまらない」「少しあてはまらない」「どちらともいえない」「少しあてはまる」「あてはまる」の回答割合です。

「少しあてはまる」「あてはまる」、つまり「分かるようになった」と答えた生徒の割合は、英語では 21%、数学では 47%、国語では 20%の割合でした。国語に関しては、授業を受けた人数が少なく、判断しかねるところもありますが、全体的に、「リカバリーを受けて分かるようになった」と思えた生徒は少なかったといえます。これを受け、二学期にむけて、次のような改善をしました。

改善ポイント

①黒板を使っての一斉学習から、個々に課題に取り組む個別学習へと変更

②やる気や集中力が持続するように内容を工夫

一つ目は、黒板を使っての一斉指導から、個々に課題に取り組む個別指導へと変更したことです。

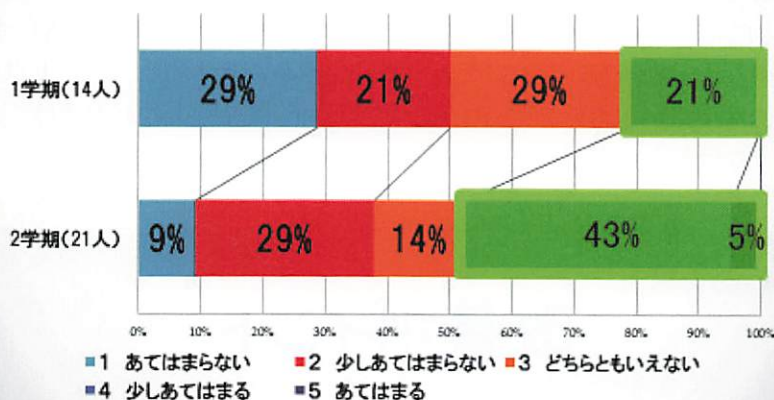
取りこぼしている内容を主に一斉学習の形態で行っていましたが、個別学習を多くすることで、一人ひとりに対応できるようにしました。

二つ目は、やる気や集中力が持続するように工夫することです。

苦手なことに集中することがとても難しかったり、分からないことがあるとすぐにやる気がなくなってしまうたりする生徒が多いため、そのような生徒でも、最後まで取り組めるように、個別学習をメインにすると同時に、課題の量や難易度を生徒のやる気に合わせて調整しました。

アンケート結果

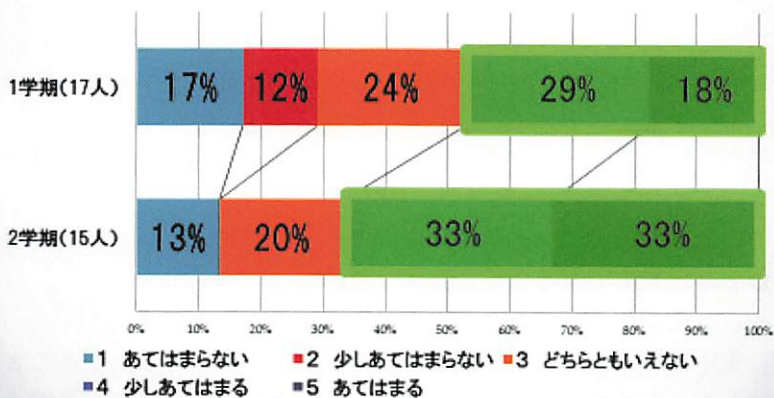
英語



このような改善を行った結果、英語では、分かるようになったと感じた生徒の割合が 21% から 48%に増加しました。

アンケート結果

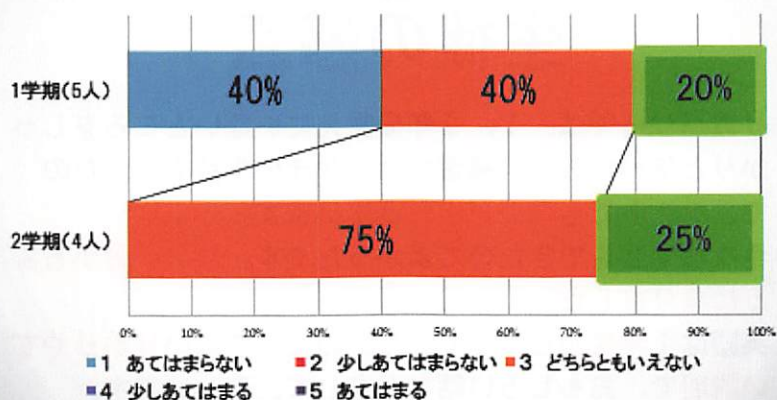
数学



数学では、分かるようになったと感じた生徒の割合が 47%から 66%に増加しました。

アンケート結果

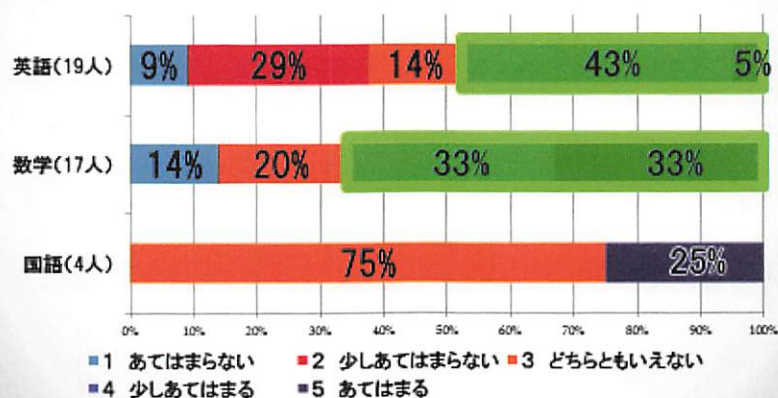
国語



国語では、分かるようになったと感じた生徒の割合が20%から25%に増加しましたが、一学期、二学期ともに受けた人数が少ないため、成果とは言い難いところではあります。

アンケート結果

2学期



二学期末の結果をまとめると、このようになります。二学期末の時点で、英語、数学に関しては、分かるようになったと感じられた生徒が半数以上おり、リカバリーを行った成果が表れていると考えています。

生徒の感想

- ・リカバリーでは、1，2年の覚えていないところをしつかりと学びました。補習では、3年の学習もできたので、**テストでも結果が出た**と思います。
- ・色々な勉強をできたのでよかったです。**数学が分かるようになりました。**
- ・英語は**1年生からやっていないので、すごい分かりやすい説明**で、おもしろい話などをして、楽しいです。

次に、生徒の生の声を紹介します。

- ・テストでも結果が出た
- ・数学が分かるようになった
- ・1年生からやっていないので、分かりやすい

このように、リカバリーを受けたことで、効果があったという感想があります。

生徒の感想

- ・ 時間が短いので、勉強になったとは思いませんでした。学習意欲の向上になったのは確かだとは思いますが。
- ・ 理解力のない私には全部が難しいです。
- ・ 社会と理科もあるとよいと思いました。
- ・ 各自のレベルに合わせるなら、復習だけでなく、予習もした方がいいんじゃないかなと思いました。

一方で、このような感想もあります。

- ・ 時間が短い
- ・ 全部が難しい
- ・ 各自のレベルに合わせるなら予習もした方がよい

というものです。まだまだ、一人ひとりへ対応しきれておらず、せつかくのリカバリーの時間が有意義なものになっていない生徒がいることが分かります。

職員アンケートより

- ・ 二学期は2名で、発展学習ができ、**数検合格**という成果が出せた。
- ・ 方程式や因数分解などの計算に取り組み、**基礎計算力**がついた。
- ・ 1年生の内容を復習することで、**リカバリー前よりも理解が進んだ**。

次に、担当した職員でリカバリーを振り返った結果です。

- ・ 数検に合格できた
- ・ 計算力がついた
- ・ 理解が進んだ

と言った、成果があった一方で

職員アンケートより

- ・ 個人差が大きいいため、**単一の教材では不具合が生じてくる**。単一の教材を用いる場合、いかに各生徒の”リカバリー”としていくかが、今後の課題。
- ・ プリントを渡してやらせるだけでなく、**一人一人の希望を聞きながら**、その都度柔軟に対応して問題を出していきたい。
- ・ 数学と英語が積み重ねが大切な教科なので、**この2教科を中心に**行くとよいのではないか。

- ・単一の教材では不具合が生じてくる。
 - ・一人ひとりの希望を聞く
 - ・英語と数学の2教科を中心にしようか
- というような課題や改善点も出てきました。

成果

**①英語、数学では、半数以上の生徒が
「分かるようになった」と実感**

②英検、数検、漢検に合格

以上のことを踏まえまして、これまでのリカバリーの成果と課題は次のようなことであると考えました。

成果として、

一つ目は、半数以上の生徒が「分かるようになった」と実感できたことです。

リカバリーという授業を行ったことで、英語と数学については、半数から6割の生徒が分かるようになったと実感することができました。このことが、リカバリーの一番の成果だと考えます。

二つ目は、英検、数検、漢検に合格したことです。

ただ復習するだけでなく、検定という目的意識をもつことで、やる気につながるだけでなく、目に見えた成果によって達成感を得られたのではないかと思います。

課題

①分かるようになったと実感できなかった生徒が約半数

②個のニーズへの対応

課題としては、

一つ目は、分かるようになったと実感できていない生徒が半数近くいること

二つ目は、個のニーズへ対応しきれなかったことです。

人数が多くなると、一人一人のニーズに対応しきれないことや、個人差が大きく、単一教材での対応が難しいことが課題として考えられます。

リカバリーの今後

①生徒の実態把握

②個に合わせた柔軟な対応

これらの課題から、リカバリーをよりよい時間にするためには、次のようなことが大切であると考えます。

一つ目は、生徒の実態把握 です。

生徒がどの範囲を取りこぼしているのか、どのようなことをリカバリーしたいと思っているのかを把握することが大切になってきます。

二つ目は、個に合わせた柔軟な対応をする ことです。

生徒の実態把握に努め、それらのニーズや担当教員の見立てをもとに、個別に教材を選んだり、進め方を工夫したりすることで、「分からなかったところが分かるようになった」と実感できる生徒を増やすことが大切だと考えます。

リカバリーとは

**生徒が学校へいっていなかった時期や学校へ行っても学ぶ意欲が発揮されるに
いたらず、取りこぼした内容について復習
する時間**

目標

不登校の間に取りこぼした内容を取り戻し、学力を向上させる。

リカバリー開始一年目ということで、様々な課題が見えてきましたが、個に合わせて補習を継続的に行い、不登校の間に取りこぼした内容を少しでも取り戻したり、理解できなかったところを理解できるようになったりしていくことで、通常授業でのやる気や日常生活の自信につながるようにし、リカバリーの時間を生徒たちにとって有意義な時間にしていけるようにしたいと思います。

ご清聴

ありがとうございました

以上で、リカバリーの報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

嶋野先生 リカバリーについて、何かご質問等、ありますか？

会場、質問者 はい。数学、英語などの教科を教えていても、結局は、国語の、日本語の語彙の少なさを感じるのですが、リカバリーの国語では、語彙を増やしていくような、語彙を補う活動はどのようにされていますか？

中橋 私の担当が英語ということもありまして、他の教科は分かりかねるのですが…。

会場、質問者 国語だけでなく、英語の授業でも、生徒の国語の、日本語の語彙の少なさを感じることがあると思うのですが、そのときに、授業でどのように扱うのでしょうか？

中橋 それは、ございます。英語を理解する上で国語力、というのは、すごく大切ななあというのは職員同士でも話はするんですけども、そこまで踏み込んだ授業というのはできていないところでございますので、また検討させていただきます。ありがとうございます。

嶋野先生 今のお話は、数学も関係しますよね。きつとね。昔、国の指導要領では、現行のものでも、言語活動の充実といって、国語という教科にとどまらずに、全ての中で、言語活動を充実させることを言っているんですけども、今、ご指摘の話に通じるんじゃないかと思うんですけどね。はい。よろしいでしょうか。じゃあ、次いきましょうか。太田さん、ライフ・プランニングお願いします。

ライフ・プランニングとは

自分の生きる社会や関係性の中で、自分の人生の基盤、ひいては、人生そのものを作っていけることができるように



太田 ライフ・プランニング、という時間は、お手元のパンフレットにも載せてありますが、堅苦しく言うと、このようなことを目的としています。西濃学園の生徒は、発達の特性の課題を持っていたり、また、家族やこれまでの学校での人間関係の中で愛情を巡る課題を持っていて、生きづらさを抱えやすい生徒が多いのですが、一人ひとりが少しでも社会の中で生きやすくなってほしい、幸せを感じやすくなってほしいという願いをもって設置された時間です。そして、そのためには、どんなスキルが求められているだろうか、と問い続けている授業でもあります。

年間35時間

二週間に一回、二時間枠で

中1・中2は合同クラス

中3のクラス

高校でも実施



全学年、年間 35 時間実施をしますが、二週間に一度、連続した二時間を使って行っています。また、科目名は違いますが、中学だけでなく、高校でも行っています。

一年間で

中1・中2

コミュニケーションのあれこれ

アンガー・マネジメント、など

中3

聴き方、話し合いの練習

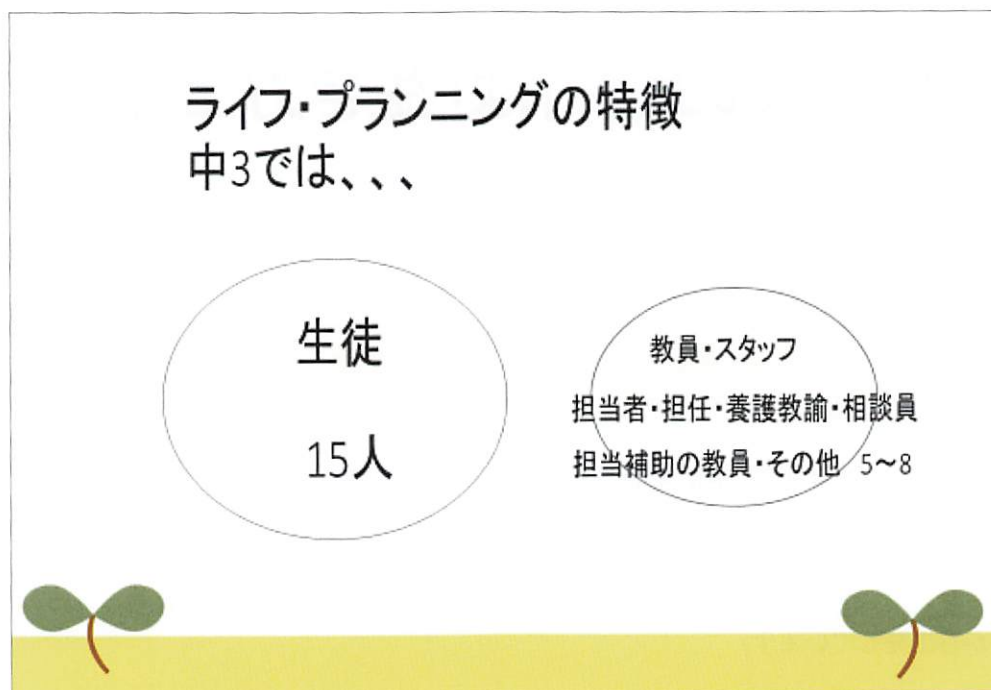
未来への展望について、など



この一年間を通して、例えば、こんなことをやってきました。

時間割や生徒数の関係で、中1と中2は合同で行っていますが、中1と中2では、気持ちのいい相互的なコミュニケーションについて体験的に学んだり、感情を扱うことについて学んできました。

中3では、地域学習の協働学習にも活かすことができるようにと、「聞く」ということや「話し合う」ということを盛り込みました。また進路や今後の目標といった未来への展望を意識した授業もやってきました。



ライフ・プランニングの最も大きな特徴は、かかわってくれている先生方がとても多い、ということです。スクールカウンセラーの私がまとめ役として今日もこの場に立っておりますが、実質的にこの時間を動かしてくれたり、生徒と関わってくれるのは、担任をはじめ、養護の先生、相談員の先生、他の教科の担当だけど補助で入ってくれている先生など、少なくとも5名、多いときには、8名の大人が授業に入って生徒とかかわってくれます。

第一回目

「叱られ上手」は「生き方上手」

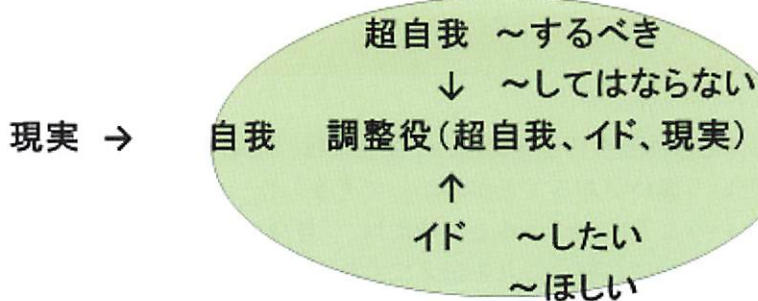


今日は、中学3年生の二回にわたる授業の取り組みをご紹介します。一回目は、「叱られ上手は生き方上手」というテーマで授業を行いました。この「叱られ上手」というのは、担任が、これまで自分の人生を振り返った時、自分が人生を豊かに生きてくることができたのは、「叱られ上手」というスキルや知恵があったからだ、という熱い思いから出発しています。

一般論ではなく 教師の実体験をともなった 生徒に伝えたいこと

このように、一般論から出発するのではなく、生徒と最も長い時間を、そして深くかかわる担任の実体験から出てきた「生徒に伝えたいこと」というのは、とても力を持ちます。

こころの構造の理解



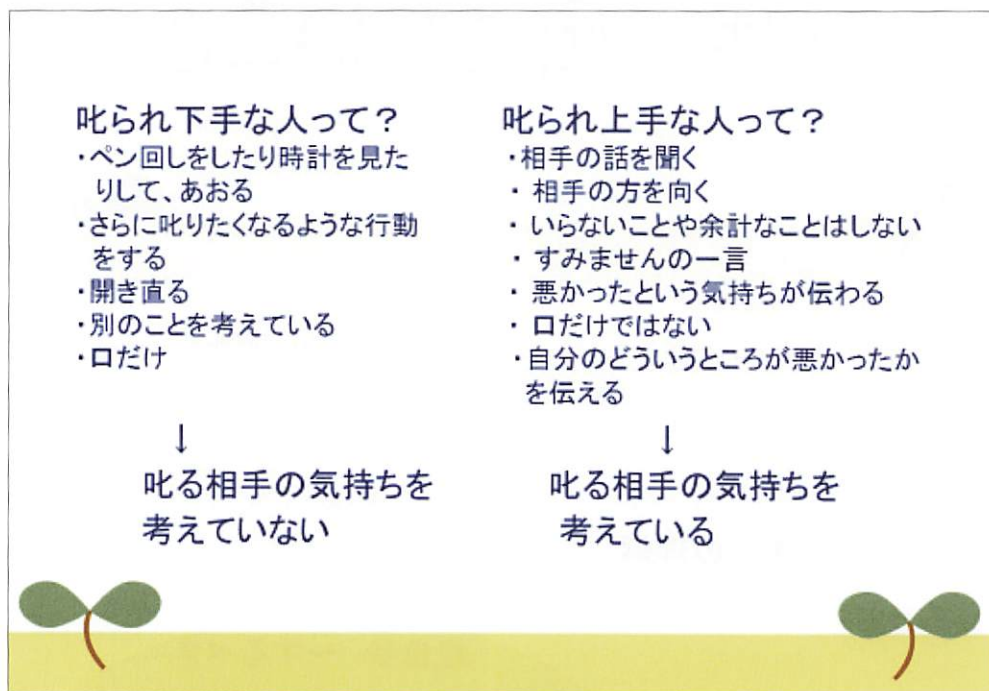
自我が成長すると、幼児期から形成された超自我を崩し、もう一度作り直そうとします。そして、反抗期が生じます。それが思春期です。

まず、この回は、このような図を黒板に書いて、心の構造の理解の仕方を生徒に伝えまし

た。そして、子どものときには素直に大人の言うことを聞いていた人でも、思春期になって自分というものを作り始めると、反発をしたくなるのが当然なんだ、だから叱られるのが苦手になりやすいんだ、でも、それは大人への大事なプロセスなんだ、と思春期の心理について、伝えるところから始めました。

そのうえで、担任から、大人になったときに叱られ上手になってもらいたい、という思いを、自分の体験を振り返りながら、こころのこもった話をしてもらいました。

そして、みんなの考える「叱られ上手な人」と「叱られ下手な人」を挙げてもらいました。黒板を分割して、左右に、生徒たちが挙げてくれた、それぞれの特徴をこんなふうにして書いていきました。



すると、「叱られ上手」と「叱られ下手」では、叱る相手の気持ちを考えようとするかしないか、という違いがあることがわかってきました。叱る相手にもその人の思いや気持ちがある、ということに気づけると、時には、「自分のために思って叱っているんだ」「叱ることを通して自分に必要なことを伝えてくれているんだ」ということに気づきやすくなります。普段の担任との関係があるからこそ、のことなんです、担任が伝えたいことのひとつだった、「愛情があるからこそ叱るんだ」ということは、生徒たちのからだに、こころに、落ちていったと感じました。

そして、自分にも気持ちや思いがあるように、相手にも気持ちや思い、心というものがあるんだ、と実感できる体験は、西濃学園の生徒にはとても大切な機会だと考えています。一度体験をしたからといって、しみわたっていくものではありませんが、それでも、大切な機会だったと思います。

「叱られ上手」の考察

STEP1 相手がなぜ怒っているのか
想像してみる

STEP2 伝わる謝り方って？

STEP3 自分が悪かったところを
言葉にしてみよう



一回目の「叱られ上手は生き方上手」の授業は、ここから、生徒に実践をしてもらいながら、このような次のステップを学んでいったのですが、私は、授業の最後を、叱られ上手には「かわいげ」があるね、人にはかわいげって大事だね、と締めくくってしまったのです。

すると、授業後、「私はかわいげがない」「かわいげがないと言われてきた」と、三人の女の子たちからすぐに反応をもらいました。

でも、かわいげの塊みたいな子たちが、そんなことを言うのです。

私たちは、驚きましたし、一人ひとりに自分にはかわいげがあるんだ、ということに気づいてもらいたいと思いました。

第二回目

「かわいげ」について

そこで、二回目の授業は「かわいげについて」やろうと決めました。

Aさん
ねちねちしていない
おもしろい表情

B君
笑顔、寝顔、
なんだかんだ動ける

Cさん
寄ってきてくれる
かまちょ

D君
意外と人のことを放っておけない
やさしいのを隠すところ

E君
野球バカ
笑顔

F君
抱き枕になってくれる
気が楽で一緒にしやすい



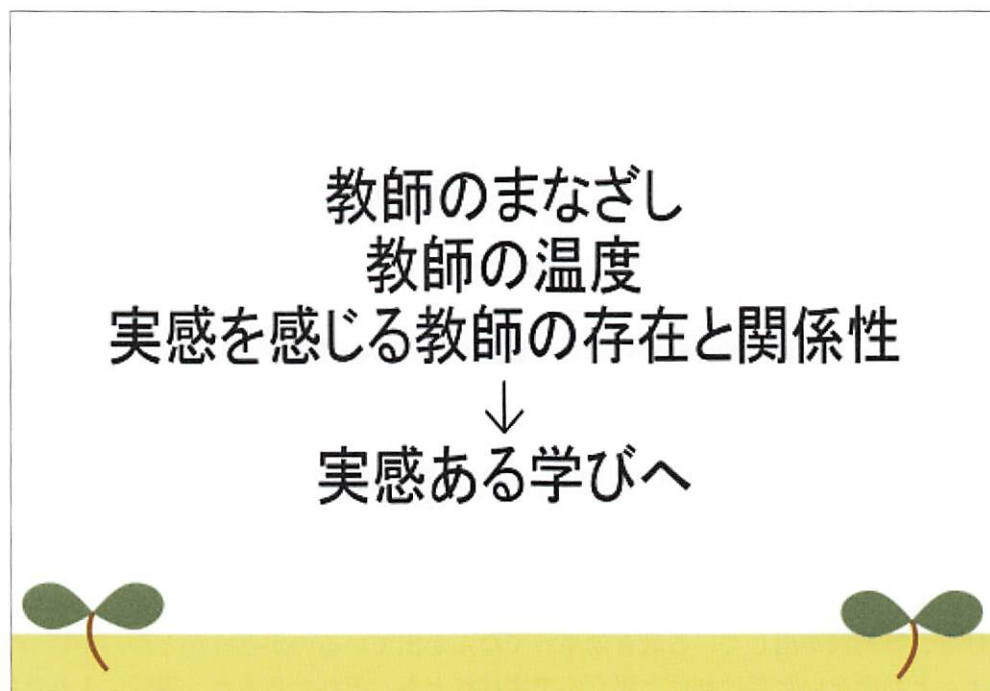
- ・ みんなかわいげがある
- ・ 深い関係だからこそわかるかわいげがある
- ・ ウィークポイントこそかわいげになる
- ・ かわいげに気づける関係って気持ちいい

授業では、生徒一人ひとりに、他の生徒から「かわいげ」だと感じるところが挙げられました。

この時間も、黒板に、生徒の意見を全て書いていきましたが、みんなの意見をみんなで共有することを大切にしています。

そこから、「みんなに可愛げがあること」「深い関係だからこさわかる可愛げがあること」「ウィークポイントこそかわいげになること」「かわいげに気づけるって関係って気持ちいいというこ」とを学んでいきました。

この時間は、最後に、新しい環境へ旅立っていったとき、どこでも通用しやすいかわいげも身につけておいてほしい、という願いとともに、割りばしを使った「笑顔」の練習で締めくくりました。



こんなふうに、担任の先生の思いから出発したことに、生徒が反応をくれて、授業が展開できることがある、というのが、今日の報告会で最も伝えたかったことです。学んだ内容云々よりも、こういう動きのなかにこそ、西濃学園で学んだことが生徒に伝わっていくんじゃないか、とその渦の中にいると感じます。

そして、先生方一人ひとりが、生徒一人ひとりにどんなまなざしで、また、どんな温度で向き合っているか、かかわっているか、ということが、生徒一人一人に、そして生徒同士の関係性にも大きく影響し、全てが絡み合って、実感ある学び、生きた学びが作られていくんじゃないかと感じます。

また、ライフ・プランニングの「授業」だけに当てはまるわけではありませんが、授業というのは、授業だけで成り立っているのではなく、生徒と教師の日々の生活と学び全体の中であって成り立っているなあということもしみじみと感じます。

このように、ライフ・プランニングは、西濃学園の日々の営みが生徒の土台を作ってくれる、ということにおんぶにだっこの授業なのですが、生徒のためにさらに役に立つ視点

や切り口について視野を広げることができたり、また、体験的な学び方としてこんな方法もありますよ、ということをお教へいただける機会になれば、大変ありがたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

嶋野先生 ライフ・プランニングについて、何かご質問ありますか？はい、お願いします。

会場、質問者 報告では、二つの授業の報告がありましたが、どのような分析をして、生徒に必要なスキル、という視点で一年間の計画を立てるのでしょうか。

太田 授業を考える際は、個々のスキルというよりも、私って大事な人間なんだ、という自尊心、自尊感情を持ってもらいたい、ということをお優先して考えています。そして、個々のスキルに関するようなところは、日々の生活の中で、どのようなトラブルが起こりやすいのか、どんな困り感を持っているか、どんな人間関係が子どもたちの中で展開されて、どういうところが壁になっているのか、というところを日々担任の先生と情報交換、話し合いをしながら探っていく、という現状です。

嶋野先生 ちょっと専門的になれば、教育課程を、どう構造化していったか、というお話になるんですけど、また時間があつたら、聞いてください。

それでは、ここから、シンポジウムに入りたいと思います。皆さん、私、うっかりしてたんですが、西濃学園は不登校特例校を今年度から受けているわけですね。

不登校特例校、ってあんまり耳慣れないんじゃないかと思うんですけども、特例校って何だ、ってことをちょっと文科省来てますので、お話をいただいて、特に不登校特例校っていうのは何か、あるいは、全国にもこの特例校ってたぶん11校くらいあるんだと思うんですけど、特例校が出している教育効果ってなんか出ているのかどうかとか。かいつまんでちょっとお話をいただければと思うんですけども。それからまた、議論に入りたいと思います。

松林氏 文部科学省でございます。今、フリースクールとかいうのはかなり報道等でみなさんよく聞かれると思うんですが、嶋野先生がおっしゃられるように、不登校特例校ってまだ意外に知られていない存在でございまして、これ、大事な制度でございまして、これからさらに拡充していきたいと思っています。

どんな制度かといいますと、実はまだ歴史が比較的新しくて、平成16年でございまして、今からまだ十数年しか経っていないんですが、要は、日本の学校は、小学校、中学校、高校っていうのは、学習指導要領っていう下で、例えば、算数はこれくらいやる、これくらいやるっていうふうに、しっかり教育課程、カリキュラムが定まっているわけでございます。ですから、すべていわゆる学校っていうのは、そのカリキュラムに従って、法律上、やんなきゃいけないことになってございます。

ところが、不登校の児童、生徒さんが入る学校では、その実態に配慮した特別な教育課程を編成しますよ、と。そういう場合は、制度としては、そういうカリキュラムを作った

いって学校の方が、文部科学省のほうに申請いただくと、文部科学省の方でも、学校教育法の趣旨に反していませんか、とか、後、そういう不登校の子どもたちの事情に配慮した指導が行われているか、ってところを審査した上で、文部科学大臣がですね、これはいいですよってことで指定させていただいているってことでございます。

まだ、実はですね、全国に、西濃学園さんが昨年4月に指定されたってことで11校しかございませんで、極めて少ないということで。フリースクールにはフリースクールのいい点があります。ただ、フリースクールですとフリースクール行って、ただ卒業…まあ出席扱いにはなるんですが、卒業証書は元の学校のほうでもらうって形になるんです。フリースクールはフリースクールで素晴らしい教育をやっているところいっぱいありますが、学校に行きたいと、思われる方もいます。少し柔軟なカリキュラムで学校に行きたいって、そういうニーズもあるんですね。そういうお子さんたちには特例校がもっと出てですね、特に私立はあるんですが、公立はほとんどない、という状況でございますので、われわれしっかり、こういう不登校の子どものため、特別なカリキュラムでできる学校が、増えるようにしていきます。頑張っていきたいと思います。

効果でございますけれども、効果は、それぞれ、各学校によっても特徴がございまして、後のほうでコメント申し上げると思いますけれど、例えば、先程、コラボレイトといったような地域との密着っていうようなところ、この学校の素晴らしいところだと思います。都会にある特例校とは、また違ったような効果があるんじゃないかと思ってございます。

嶋野先生 ありがとうございます。もう一つ、私から、もうちょっと補足をしておきますと、学校って、今、お話があったように、教育課程っていうのを組んでまして、みなさんも、もちろんご承知だと思います。学校は、国語や算数や理科や社会や道徳や音楽や、こういうもので学校の授業が構成されてるわけですね。会場の後ろに、西濃学園のこのパンフレットが置いてありますが、3頁4頁に、授業の種類と総時間数についての一覧表が出ているんですね。で、ここに、国語、社会、数学、理科、外国語、音楽、美術、技術・家庭、保健体育、道徳、特別活動、云々とあるんですよ。

で、コラボレイトとか、ライフ・プランニングとか、リカバリーというのは、国語や算数と同じように、一つの科目になっているんですね。でもこれは指導要領には決められていないわけです。ですから普通、こういうものを特別に作ることはできないんですけども、やはり不登校や何かで、生徒の事情や何か、大きく違っている場合は、その指導要領によらずに、独特の、独自のそういう科目を作ってやることのできる、ということなんで、相当の創意工夫をしたり、やってみてはまた、改善を進めたりしながら、生徒が育つ、そういう環境を作っていると。そういうことで、西濃学園中学校パンフレットの4頁の表の、白い部分は、一般には指導要領には載ってないところ。これができる学校ということなんですね。あの、そういう前提でちょっとこれからまた、お話をお聞きいただきたいと思います。

嶋野先生 それでは、まず、特例校や教育効果などについて少しお話をいただいたところで、西濃学園さんは、端的に言って今のような3つの科目を独自に作ってるんですが、それは、学業不振をめぐる問題、それから人間関係をめぐる問題で不登校になっている子ど

もが非常に多いと。だからこの問題をなんとかして、この学園にきたら解決してやらないといけないう。そういうことで、コラボレイト、地域と一緒にやるやつですね。それからリカバリー、遅れた学力を取り戻してあげようというリカバリー、それとライフ・プランニングという、人間関係等を作っていく、社会に出てもそういうことができるようにしていくっていう、この3つを作っているわけですね。これについては、専門家の立場、あるいはそういう有識者の立場からしたらどういう風に評価されるのか、非常に気になるところなんですけど、譲先生は講演の中で、「頭が下がる思いだ」というふうにお受け止めになられたようなんですが、改めてこの独自の科目についてどう受け止められたか、お話しただけですか。

譲先生 はい、ありがとうございます。特例校ってのは、わたしも全く勉強不足というか、11校しかないとか、そういう学校があるということも、今日初めて聞かして。

嶋野先生 逆にすごいことですよ？

譲先生 はい、ここへ来てよかったなあと、ホントに今、思うとるんですけど。あの、でも考えてみると、この西濃学園さんの取り組みっていうのは、西濃学園だからっていう、西濃学園だけのことを考えてっていうよりも、やっぱり教育全体の本質を、私たちに、問いかけてくださり、それを実践してくださってるっていう感じはするんですよね。

いろんな問題がある中で、今日、講演の中でも少しお話しをさせていただいたんですが、そういった子どもたちの人間関係の弱さとか、学業の弱さっていうことを、地域との交わりの中で、子ども同士の交流が深まっていくとか、勉強するのは当然そこに一人ひとり個別に励ましたり、受け止めたり、認めたりっていう、今日の話しましたドラえもん評価じゃないですけど、そういったことを当然されていくわけだし、そして将来のことを考えていけば、当然そこにアイデンティティーのライフ・プランニングってのが出てくるっていうことですが、これは、考えてみれば、教育全体の中で、今、文科省の方では学習指導要領ってのが金科玉条の如くですね、あの水戸黄門の紋所が、みたいな感じで、みなさん、「はは〜」と、こう、従うわけですけども、でも実際に、全部の先生方が取り組んでおられることっていうのは、こうした西濃学園さんが努力されているようなことが、授業を絶対やっていく中には、隠されていますが、ご努力されながら、苦勞されながら、やれていることだっていうふうに思うんですよね。

ですから、そういうことからいけば、教育の本質っていうのは、成果を上げるためにはどうすることが必要なかっていうことを、むしろ不登校の子たちがそういう行動で私たちに投げかけ、それを受け止めて、教育の本質の実を上げるためには、西濃学園さんがこういう形で答えてくださっている。そういう先生方のご苦勞ということがあるんですよって、学習指導要領はみんなやっているんだけど、こんなに先生方は苦勞してるんですよってことを、文科省の方々にですね、強くアピールしてくださっていると、そういうことなのかなという感じで。よく文科省の先生方聞いてください、みたいな。言っただけじゃないことかも知れませんが、言っただけでした。はい（会場、笑）。

嶋野先生 今日いらっしゃってるんで、文科省の方はどういうふうを受け止めてるのか、ちょっとお聞きしたいと思います。

松林氏 耳が痛いところでございますが、文科省でもいろんな考えでございまして。確かに学習指導要領ですね、金科玉条のようにやってきた面もあると思います。

一方で、ただ、不登校の子どもさん達に対する支援の考え方っていうのは、ここ2、3年劇的に変わってございまして。例えば、一昨年ですね、一昨年の12月にも、教育機会確保法という法律ができました。そこでも、学校での教育で、不登校特例校も設置しましょうと、それから教育支援センターを整備する。いわゆる適応指導教室も整備しましょう、あるいは、他のいろんな、学校以外のさまざまな適切な学習の場があってもいいんだっていうところまでも法律に謳ってございますので、いま文科省の、私どもの考え方としましては、普通の学校に行ってもいいし、特例校もあり、あるいは適応指導教室もいいと、あるいはフリースクール行くとか、家で学んでもいい、と、いろんな道があっていいということでございますので、ホントに、今日、譲先生がご講演でおっしゃっていた、問題行動調査は、文科省のやってる問題行動調査のデータにもあります通り、一口に不登校児童、生徒といっても、ほんとにいろいろなタイプがあると。学習不振が原因になっている場合、家庭に課題があるパターン、それから友人関係、それが複合的なタイプ、また、いろいろございますので、やっぱり個別の生徒の状況に応じて、いろいろな機会があっていいのかなって思いますし、また、いろんな教育のカリキュラムがあって然るべきだと考えています。引き続き、いろんな様々な、教育機会ってものが、全ての子どもたちに、もたらせることができるようにですね、努力して参りたいと思います。

嶋野先生 はい。ここでちょっと、指導要領とか、そういうものについて、考えをちょっと、柔らかくしておいた方がいいんじゃないかと思いますが。指導要領というのは、国がもう、これをガチガチに決めてですね、これ以外罷りならんというものではなくて、これ、教育の保証っていう意味では、たとえば、ウチは国語やりませんよとか、ウチの学校は算数やりませんとか、勝手にやられたら、教育保証できませんもんね。ですから、それはきちんとやってくださいと。だけれども、意外と柔軟性がありまして、こういうところはもう、地域学校に応じて工夫をしてくださいとか、そういうものがたくさんあるわけですね。例えば、総合学習なんかはまさに、内容は国で決めてません。それから、もっと工夫が必要なところは、こういうふうに特例校っていうのを設けて、その決まりに定まらずにやっていいということ、そのことが定められてるので、意外と多くの人たちが思ってるほどガチガチなものではなくて、けっこう創意工夫を求めているもんだと思います。そうしないとな、教育効果上がらないんだと思いますね。

これは学園長にお聞きしたいんですが、いま譲先生は、これ西濃学園の特別の問題というよりも、人間とは何か？とか、あるいは生きるってどういうことか？、とか、あるいはそもそも教育って何だ？っていう原点から、西濃学園が提言してるっていうふうを受け止めたっていうふうに仰ってるんですけど、やっぱり、それをお聞きになっていかがですか？

学園長 今、譲先生が言われた通りなんですけども、もともと私がこういう学校が欲しい

など思ったのは、前勤めていた高校で不登校になって、学校に来れなくなったと、だけど、何らかの支援、手立てをすれば、結構元気になっていく子どもたちもいるんですね。これは、単なる甘えだけではない、と僕は感じたわけなんです。それで、最初は、情熱でぶつかっていけば、人間と人間との関係が改善されるんじゃないか、とこれが私共の作った最初のフリースクールの原点だったと思うんですけど、けども、僕は、子どもというのは、さっき、譲先生のお話にもあったんですが、我々が大人になっていく、子どもが大人になっていくためには、集団の中で切磋琢磨しなきゃいけない、で、そういう集団というのは、今の日本ではやっぱり学校が中心ではないか、と。で、そういう集団の中で、生徒が、自分が大人になっていく、勝ち取っていくためには、情熱とか、そういう思い付きだけではなくて、やはり学校教育の中で、何らかできないかな、というのが僕の発想の原点であり、教員の原点である。ただ、指導要領をそのまま実行するには、非常に難しいし、僕はこういう人間関係の原点はやはり今の揖斐川地域のような皆さんと一緒に子どもたちが触れ合うところに原点があると感じている。それをよりよくするためには、文科省に特例校の申請をしてやりやすくしてみたわけです。それが僕の考え方の原点で、譲先生が言っていたいただいたことをすごくうれしく思っております。

嶋野先生 さっき、あの日置さんのね、高校三年生の「私の主張」で、それと関連すると、すごく思いましたね。彼は、中学校の先生の情熱は、すごく感じていたわけでしょ。一生懸命やってくれと、と。でも西濃学園へ来たときに、ここなら自分は変わる、と自分を変えられるんじゃないか、と思ってここへ来た。あるいはやっぱり、一人ひとりの情熱もあるけれども、学園として組織、とか学校体系、そういうもので感じたのかな、というふうに思ったんですけども。まあ、おそらくこの提案は、科目の学力を個々につける、というよりも、大前提、氷山の水面下のことでいえば、人間とか、教育とか、生き方とか、そういう問題にかかわる、大きな問題を言っているのかな、という気がします。その大きな一つが、コラボレイト、と。これ、さっきのアンケート、報告を見ますと、コラボレイトの特色は、地域交流とか、地域文化に触れる、ということですよ。すると、あのアンケートでは、非常に活動が新鮮だった、と。自分が今までいたところには、そういうことがなかった、と。で、藤橋に来て地域と交流したことが新鮮だったとか、一体感を感じた、とか、うれしかった、とか、よかったとか、そういう回答がたくさんありました。また、アンケート 2の方では、リーダーになった子どもは、やりがいを感じた、とか、リーダーにならなかった子は、リーダーに任せてしまって悪かった、と他者意識や自己意識がすごく交錯してきて人間関係ができつつあるとお聞きしたんですけども、どうでしょう、皆さん、不登校問題に対するコラボレイトの授業の可能性って、相当に期待できますかね？これについて、ご意見いただければと思うんですけども。それでは、文科省の方では、どんなふうに考えましたでしょうか。

松林氏 先ほど申し上げたんですが、まず、自治体の方、地域住民に方との関係の在り方、素晴らしいなと思ひまして、私も、昨年四月くらいに特例校に指定しまして、五月くらいに視察で来させてもらったんですが、そのときもいろんなお話を聞いて、そう感じました。全国のいろんな特例校さんもいろんな取り組みをしておられますけれども、比較的街中に

ある学校が多いものですので、こういう地域社会と本当に密接にかかわって、お祭りに参加して、しょっちゅう調査して、何回も話し合って作り上げていくというのは、ここの学校の、西濃学園さんの素晴らしい特徴なんだろう、と思います。今、不登校にかかわらず、体験学習をやっていこうと、国も一生懸命やっておりますが、体験活動というのはどうしても受け入れ側との調整などで学校さんも苦労されているところが多いのですが、ここは、周りの地域住民さんや自治体さんの協力が素晴らしいと思うので、是非これからも続けてもらって、もっと発展させてもらえたら素晴らしいと思います。

嶋野先生 譲先生、お願いします。

譲先生 そうですね、人間が育つということは、一人では育たない、先ほど相互性と言うことにもつながっていくのですが、実際に人間が肌で触れ合い、そして、言葉をぶつけあい、感情と触れ合って、という中から、嶋野先生もさっき言うていただきましたけれども、他者と自己ということがだんだんはつきりしてくると言うていただきましたけれども、そういうことですよね。だから、西濃学園のさっきの西濃学園の紹介のスライドの中に、ここには、新しいゲームもパソコンもありませんが、という言葉が出てきたんですね。そこにはコラボレイトということをやいぶん意識されて、生の人間と触れ合うことが先なんですよ、と。ところが今の時代というのは、みんながゲームとかスマホに子守をさせてしまって、ひょっとしたら家庭の中で親子と、そして地域では地域の住民と関わるからおろそかになってきてしまっている、そういうことを考えてきますと、これは、特例校だからこそ、コラボレイトという時間として用意されているんですが、原点として考えていったときに、人間が育っていくときに、地域を忘れた人間はあり得ない、という信念は十分伝わってきます。

嶋野先生 そうですね。来賓挨拶で、富田町長が、西濃学園は非常に地域に溶け込んでいる、とご挨拶をいただくのかと思ったら、感謝申し上げます、と。それにびっくりして。そして、過疎の地域でも、西濃学園が力になっている、というお話をうかがって、非常に感銘したんですけれども、あの三松さん、博報賞をご担当されていて、特別支援教育なんかでも、こういう、人との関わりをやる教育ってたくさんあると思うんですけれど、地域とコラボレイトしている教育活動はね、こういう、地域交流、地域文化に触れて教育効果を上げている例とか、たくさんあるんでしょうね。

三松氏 そうですね。私も仕事柄、いろいろ全国まわらせていただいて、先進的な取り組みですとか、熱心な先生方にお会いする機会をいただくんですけれども、特に、特別支援とか、不登校に限ったことではないんですが、ここ 10 年ほどで、特にここ 5、6 年で、地域に根ざしたふるさと学習ですとか、地域にあるモノですとか、ヒト、コトとかかわっていく教育というか、活動がかなり増えているな、というのをとても感じております。あの、一つだけ、本当は紹介したい事例がたくさんあるんですけれども、一つだけ、ここで具体的に紹介させていただくとすれば、秋田の大館という町があるんですね。ほぼ青森に近い場所なんですけれども、ここも少子高齢化で、若者流出ということで、人口減少に悩んで

いる町ではあるんです。ただ、だからこそ、一人たりとも置き去りにしない教育、ということを経済委員会では掲げてらっしゃいまして、教育委員会の組織の中に、特別な教育研究所という、それを専門にされる職員を設けて、子どもハローワークという取り組みをしています。大人が行くハローワークと全く一緒なんですけれども、地元の企業さんが子どもたちを募集して、そこに子どもたちは、学校を通じて応募します。何回でも、好きなものに、好きなだけ参加していい、という決まりがありますので、そこでまず、子どもの自主性が尊重されておりまして、子どもたちは、いくつも活動していく中で、自分の興味あることとか、自分の得意なことってこういうことだったんだと気づいていく、こういった、地域とコラボレーションした形をとられている地域がございます。どの地域、どのエリアでなされている活動を見ても、私が共通して感じるのは、教育の場が学校の中だけにとどまらず、地域に移ることで、地域に出て行くことで、子どもたちの視野ですとか、価値観が広がりますし、社会人として必要な力を地域の大人の方たちから直接学んだり、子どもたち自身が気づくきっかけを直接与えてもらっているんじゃないかな、というのをそれらの活動を見て、感じております。

嶋野先生 共通しますね。何か、西濃学園の生徒も、藤橋って地域は、来るまではヨソの地域ですもんね。だから、他人(ひと)事が自分事になってくる、というのが、何回も何回もキーワードで出てきたんだけど、それって、すごい変化ですよ。どうですか？地域に支えられている、というのはありますか？コラボレイト。

真嶋 そうですね。地域の方々と生徒が交流する機会はとても多いんですけれども、藤橋地域の方々も西濃学園の生徒が不登校生、というのを配慮しながら接してくださっていますので、その点は、とても助かっております。そういったところから、生徒も、地域っていいものだな、と思えるようになって、対人関係が広がるんじゃないかな、と思っています。

嶋野先生 はい、ありがとうございました。そういうことで、これからも続くんじゃないかなと思いますけれども、それではですね、次の、リカバリー、というのがあって、これは、学業不振を巡る問題に対応した授業、と、ということなんですけど、こういうリカバリーというのは結構行われているものですが、西濃のリカバリーの特色というのはなんなんだろう。あの、これ、文科省の方で。

松林氏 はい。全国の他の特例校さんも、やっぱり、習熟度別の学習、とか、個別指導、とか、そういうところがいくつかある、ということは聞いております。先ほどのご発表を聞いておりましたけれども、特に、学期ごとにですね、アンケート取ってですね、すぐ軌道修正をしている、これ、本当に素晴らしいと思ひまして、普通、大人が決めちゃいがないんですが、分かるようになったという子が、20%、30%ですと、あつ、ちょっとやり方に問題があるのかな、と柔軟にですね、率直に把握された上で、また、方針を柔軟に改善されている、という点が、本当に素晴らしいと思ひました。

嶋野先生 譲先生、お願いします。

譲先生 さっきの、不登校の理由として、いろんなお子さんがおられるんだろうと思うんですけども、学業という点においては不登校の子たちは圧倒的に、ダメだよ、あんたはできないよ、という形のダメ出しをされてきてしまった子どもたちが多いんだろうと思うんですけども、それを個別に、一人ひとりに対応しながら、また、さっき、目的と達成感を大切にしているんだ、という話をしてくださったんですが、あえて、英検とか、数検とか、漢字検定とか、つまり、全国の同じものさしのところに乗っかって、それで、自分たちの目標とか、達成とか目指していくということは、見捨ててないよ、ということ、やればできるよ、ということを具体的にフィードバックする上においては、非常に、いい一つのものさしだと思うんですね。そういうものをあえて目標にしながら、でも、その育て方というか、伝え方、授業のやり方は、非常に個別的に、さっき申したことでいえば、多分、一生懸命、一人ひとりのできたところを認めながら、そして、レベルを上げていく、そしてアンケートを取りながら、柔軟にやり方を変えていく。そして具体的に一人ひとりには、みんなと同じものさしを、僕たちは捨てたもんじゃない、やればできるぞ、ということを非常にモチベーション持ちやすいように設定しておられる、その辺というのは、ああ、なるほどな、と。そういう検定とか、そういうものは避けた方がいいんじゃないか、という考え方もあるような気がするんですが、あえて、やり方に柔軟性を持っておられるからこそ、そうした、全国ネットの検定を目標にされていく、というのは、なるほどなあと思いました。

嶋野先生 そうですね。私も、学業不振に陥っているのに、漢検とか、全国のそういうのを受けさせる、って逆にまた、自信を無くしちゃうんじゃないか、という不安だってあるわけですね。そういうの、なかったの？

中橋 検定につきましては、それぞれ級によって学年のレベルがあると思うのですけれども、例えば中3の子でしたら英検三級なんですけど、レベルとしては、そこを受けるように、というのではなくて、各自のレベルに合わせて、一からスタートをして、ここまで頑張れた、という、中3でも、五級受ければ、頑張ったね、よかったね、と言う、そういった意味で、ある一定のレベルを目指しているというよりは、その子の進歩を目指している、というところなんです。

嶋野先生 なるほど。そこがポイントなんだね。だから、中3だったらこれ受けなきゃ、これ受からなきゃだめだ、そういう基準じゃなくて、自分でどこ受けられるかをやる。これ、譲先生、講演の中でおっしゃっていた、ドラえもん評価の、伸びた評価と通じるんですね。

譲先生 そういうところって、当然あると思いますね。自分の中でやれた分を、あなたは何年生だから、これだけやれなきゃいけないよ、ということではなく、自分に応じたところで、前よりこれだけできた、と一人ひとりフィードバックする上では、そうした、検定という全国みんなが共通にやっているものさしの中で、自分の伸びた部分を認めやすいという部分では、一人ひとりが分かりやすい、本当に上手に、検定を利用されている、発想

だな、と思いますね。

嶋野先生 内には、伸びた部分を見ている、それが、外の、全国レベルの眼でも見ている。いや、すごいな、と思いますけれども、リカバリーでは、もっとこれを充実させるために、生徒の実態調査とか、個に合わせた柔軟な指導をやっていかなければならない、というふうに言っていたんですが、こういうことについて、何か、助言がございますか？もうすでに出ているかもしれないんですけど、担当者の方は、それが課題だと言っているのです。

松林氏 やっぱり、危惧しておりますのが、習熟度別の学習といいますかのが、やっぱり、かなり、教職員の方のマンパワーが必要だっていうことでございまして、今、国としてましては、これはまだ将来の課題なんですけど、不登校特例校という認定を差し上げるだけで、その後、具体的なご支援ができるという制度になっておりません、制度上は、通常の私学助成、通常の私学と同じ範囲内、という規定になっております。ところでやっぱり、こういう不登校の子どもたちを対象とした学校というのは、どうしても、教職員のマンパワーが必要だ、というのでございますので、こういう個別指導をもっと充実させていくには、そういうリソースの面でどうするのか、これから、今は私たちは答えを持ち合わせていないんですけども、課題として一生懸命考えていきたいと思っております。

嶋野先生 うん。今、いくつか、答えをいただいていると思うんですけども、一つは、譲先生おっしゃったように、一年待って、見直しをしているわけじゃなくて、途中で見直しをしていますよね。一学期終わったときとか。いわゆる、今言われている、カリキュラムマネジメント、という、実践したら見直して、また、次の方向をちょっと改善していく、という、これを小さいサイクルでやられている、これを充実させたらいいんじゃないでしょうかね。それと、さっきおっしゃった、ドラえもん評価、伸びた評価をやっていくということ。どうでしょう。

中橋 ありがとうございます。大変参考になります。ありがとうございます。

嶋野先生 少し駆け足になりますが、もう一つの特色で、ライフ・プランニング。私は、これ、非常に西濃学園の独創性を感じたんですけども、これ、三松さん、どんな風に感じられましたか。

三松氏 はい。私も、これ、西濃学園らしいな、と思った一つの学び方だったんですけども、西濃学園の先生方の生徒さんに対する熱い思いですとか、あたたかい思いというのが、とても感じられる授業だな、というのを感じました。学校生活だけで、人生は終わりではないので、やはり、学校を卒業した後、社会に出て、どうか、というところまで、多分どのように社会生活に適應していくか、というところが求められていく。重要なところだな、と常日頃から思っているんですけども、それを、先生の実体験、テーマを先生の実体験で示す、ということが、より、生徒たちにも伝わるのかな、というふうに思いました。

嶋野先生 先生がある意味自分をさらけ出しているんですね。

三松氏 そうですね。

嶋野先生 こういうのは、きわめて独創的な科目なので、全国に同じようなのがあるとは思わないのですけれども、他にも、独創性のあるものって全国にありますか？

松嶋氏 全国の不登校特例校、今、11校ございますが、いろいろな特色のある授業を行っておりまして、例えば、コミュニケーションスキルを高めるということで、自分の気持ちをどうやって相手に伝えるか、というのを実践されている学校もあるんですけれども、今、お話にあったように、実際の、具体的な「叱られる」という場面に即して、先生たちの経験も交えながら、授業を行っていく、というのはなかなか、西濃さんらしい、おもしろい授業だな、と思っております。

嶋野先生 はい。特に、私的に言えば、太田さんのやられた、「叱られ上手は生き方上手」、このテーマを解決すると、そこから問題が出てきて、「かわいげ」ということについてまた新しい議論が始まる。こういうところに、私は非常に興味を持ったんですけれども、あの、皆さん、いかがでしょうか。じゃあ、譲先生、お願いします。

譲先生 そうですね、一つは、今の、この「かわいげ」というのが一つのテーマなのかもしれませんが、人間生きていくときに、最終的には、ライフ・プランニングというのは、アイデンティティ、自分が自分として生きていく、そうしたときに、いわゆる平均的な人間になるということじゃなくて、自分自身の個性とか自分の長所とか、そういったものをちゃんと伸ばしていける、そういった社会があるということも前提かもしれませんが、ご本人自身が、自分の能力とか特性とかそういったものをちゃんと、自信をもって受けとめていける、そういう自分になっていける、という点においては、非常にその子の良さとか、そういう部分に目を向けていくという点においては、一つ、アイデンティティとか、ライフプランにおいては重要なことだと思います。それから、もう一つは、先生方の接し方が、多分、人間関係の中でよく使われる言葉ですが、アサーションという言葉があるんですね。アサーションというのは、遠慮せずに自分が引込むだけではなくて、自分の主張すべきところはきちんと主張していく、でも、それは一方的に主張するんじゃなくて、相手のことを十分に加味してその場に望ましい形で自分を主張していく、というそういうようなところのやり方のためには、相手がまず自分を受け止めてくれて、その経験のなかから、アサーションということがだんだん伸びていく、ということが言われるわけですね。ですから、自分の良さをきちんと社会に訴えていくためには、まず、受け止めてもらえる経験のなかから、自分の長所に目を向けてアサーションしていける、そういう状況を実践しておられるのかな、と、そういう感じが、毎日毎日の生活のやり取りがアサーションとなり、そのアサーションの自分へのポジティブな発想が自分という生き方へ、一つ、アイデンティティへ実を結んでくる、そんなところが見えてくるように感じます。

嶋野先生 なるほど。これ、学問的な裏付けの説明を聞くと、相当、また、自信になるんじゃない？ でしょう。

太田 はい。なんていうか、コメンテーターの先生方が、西濃学園の教育、ということにすごく、受け止めて、すごく真剣に考えてくださっている、というのが、すごく伝わってきて、すごく受け入れてもらっている、とか、感謝をしたいという気持ちに自然となれて、いい人間になれているような、そんな心持ちで今、いるんですけれども、こういう温度、というのをまた子どもたちに返していきたいなあというような、そんな気持ちになっております。

嶋野先生 なるほどね。いい温度を感じられているようなんでいけれども、会場の方から、何か、ご意見とか、ご感想とか、ご質問とかございましたら、どうぞ。はい、お願いします。

会場、質問者 うちにも、中 1 ギャップおるんです。高校ドロップも。譲先生のコメントにあったようなことがまさに起こっているんですよ。今まで、学習塾立ち上げて、点数取れば、というような思いだったり、勉強が学校で遅れるから、という思いだったりやってきたんですけれども、その部分は問題ないのに、塾には当然来とったんですけども、どうしても、学校へ行けなくなっちゃう、というところで、学校教育の指導要領の中でという立場と、学習塾という立場と、どうしてもね、経営という部分もあるんですけども、ただやっぱり、子どもさんや親御さんと対峙させてもらおうと、対峙するときに、何かできないか、と。勉強不足ですみません。フリースクールとか、そういうことだったりするかもしれないけれども、知らない部分の歯がゆさがあって、どういうところから情報を取ったりして、どういうふうに展開をしていったらいいか。今日のシンポジウムも、親御さんと悩んでいる中で、本当にたまたま、新聞記事、一面、ちょっと読んだんですよ。こういうのがあ、と。すぐ申し込ませていただいて、学園長の方からすぐメールもいただきましたけども、悩んでいる中で解決の糸口を調べる、僕らは時間の中で探すんですけれども、多分、一番悩まれるのは本人、親御さんだと思うんです。どこへどういった形でかわっていただけるのか、いけたらいいのか、というのをもし何かありましたら、お願いしたいんですけれども。

嶋野先生 でも、温度差、あまり感じないですね。西濃学園さんの熱い思いと同じような思いがあって、せっかくですから、何か今のご質問にコメントいただけますか？

松林氏 ご質問ありがとうございます。わたくしども、文科省としては、不登校の子どもというのは、どうやって支援していくのかというのは、学校復帰だけを必ずしも目的とするのではなくて、フリースクールとか学習塾とか、民間団体の場で様々な学習ができれば、支援ができれば、それはそれでいい、という考え方に立っております。従いまして、先ほど、各先生から、不登校の子どもが 13 万人になって、数が多くなってきた、と。これ、問題を重く受け止めていますけれども、直ちに、数が多くなっているから問題だというより

も、その十何万人の中で、教育支援センターに行っている子、あるいはフリースクールに行っている子、いろんな支援を受けている子と、その一方で、何の支援も受けてない子が少なからずいるわけなんです。そういう子どもをいかに減らすか、という観点で政策を進めております。ですから、具体的には各教育委員会と学校には、民間団体と積極的に連携して、協議会作ったり情報交換したり、例えば学校の担任の先生が学習塾の先生、フリースクールの先生と会って話をして情報共有をしたり、をどんどん進めてください、と言っておりまして、そういう連携の下では、出席扱いにもしてください、ということでございますので、この二十年前とは大きく変わっていますので、例えば公立学校でございましたら、市町村の教育委員会の方と一緒に連携してもらって、もし連携がなかなかうまくいかないよ、ということでしたら、また、そういう事例を教えて下されば公民連携をうまくやるように指導していますので、あの、学習塾、民間施設、支援センター、特例校、それぞれありうるべき、とおっしゃいますか、ありうるべき教育機会だと思っております。

嶋野先生 多様性になっているところをうまく活用できれば、というお話だったと思いますけれども、譲先生、専門的な立場からは、今の悩みはどう聞かれますか？

譲先生 さっき申したことにもつながりますが、一人の人間が生きていくというのはやっぱりコミュニティという社会の中で生きていくんですね。ですから、学校へ来れない子がいるから学校へ来させることだけが目的なんだ、とそういうことじゃなくて、今、文科省の方がおっしゃってくださったように、そのことだけを目的というのではなく、最終的には人生 90 年と言われているように、人生、生き切っていくことが重要なわけですので、西濃学園さんがやってくださっている、一人ひとりを大事にして、みんな捨てたもんじゃないよ、ちゃんとみんな自分なりに生きていける道があるよ、という取り組みが社会の中にもっともっとうアピールされていって、社会の人たちが、そうなんだ、人間って生きていくっていうのはいろんな生き方があるんだ、もっといえば、みんな一人ひとりの能力というものがあるんだ、そういうものを活かしていくんだ、そういう価値観も一方には啓発されていく、ということが同時進行になされていく、そういうところから行けば、この、西濃学園さんの取り組み、特例校の取り組みが、もっともっとう PR されてそのことが社会の一般のコミュニティの価値観にきちんとなっていく中で、一人ひとりが受け止められて生きていけるところに、ライフ・プランニングとか、アイデンティティということが確立されていくんだろうな、とそういう両面があるということは思っています。

嶋野先生 ある意味では、日本は相当な成熟社会になっていますけれども、そういう、成熟社会に求められる教育なのかもしれませんね。そういう意味では、何か、こういうシンポジウムのような場は、もっとあってもいいかもしれないし、これ、不登校生の未来を拓く教育、は成熟社会の未来を拓く教育、と言い換えることも可能かもしれませんけれども、学園長、今までの、そろそろ終わりに近づいてきたんですけど、どのようにお聞きになりましたか。

学園長 お話を承りまして、僕としては感慨深いものがありまして、無我夢中で作り上げ

てきた学校の教育、というか、子どもに対する教育が、理論的に少しずつまとまって来たなあと。これは、今日発表した教師だけでなく、うちの職員全員がいろんなところからきちんとやってきたところの結果だったのではないかな。と。こういうふうに思って、ちょっと自信をいただきました。僕の基本的な考えは、不登校で悩んでいる子どもたちこそ、きちんと社会に出ていってもらわなければいけない。私共を応援していただいている西濃運輸の前の代表が言われていましたが、その子たちは国の財産なんだ、だから北浦さん、しっかりがんばってよ、ということを僕は言われたわけでありすけれども、そういうことをきちんと理論的に進めていくことはさらに大切なことなんだ、ということを、今日、深く思いました。ありがとうございました。

嶋野先生 議論が、形になってきていますよね。そんな感じを僕、すごく受けました。終わりの時間が近づいてきていますので、最後に、西濃学園の取り組みはこれから続くわけですが、その取り組み、それを支えてくれる地域ですね、藤橋の皆様の寛容性も大きいと思うのですが、西濃学園と地域に向けたまとめの言葉を一言ずついただきたいと思うのですが。

松林氏 今日はありがとうございました。先ほどから、特例校、まだ全国に11校しかないと申し上げましたが、11校の中で、西濃さんの自然豊かな中で多くの子が寮から学校に通っている、と。先ほどからご説明があったような、コラボレートで地域住民の方と連携して様々な活動を行っている、と、こういうモデルは、他の特例校さんとは違う形なのかな、と、思っております。私も仕事柄幾つか視察に行かせていただきましたけれども、こういうやり方もあるんだな、というのは、また別のちょっと違った学校もあるんですけれども、と、感じております。ですから、西濃さんみたいな学校が、もっと全国でできればいいと思っていますし、土地柄、通いたいけれども通えない、というお子様もいっぱいいらっしゃるんで、我々としては、不登校特例校制度を普及しなければいけないですね。文科省の中でも、知らない人、結構いっぱいいるんで、もっとメジャーなものにして、宣伝してですね、皆さんに知っていただくと。で、もっと具体的な支援ができないか、と考えていくと、それからもう一つ、これは北浦校長先生から去年ご提案いただいて、不登校特例校の全国的なフォーラムみたいなことを作っただけかとかとご提案いただいたんで、去年の10月に全国の11校の先生方、ほとんどお呼びしてですね、学園長先生にも来ていただいて、フォーラムを開催することができました。今年もまたやろうと思っています。そういうことを含めまして、少しでも西濃学園さんやほかの特例校の活動を充実して、学校は嫌だけど行きたいんだ、というニーズはいっぱいあると思いますので、拡充に頑張りたいと思います。今日はありがとうございました。

嶋野先生 はい。松嶋さん、お願いします。

松嶋氏 私の方からは感想になってしまいますが、先生方の発表を聞かせていただいて、一昨年ですかね、北浦先生からいただいた、不登校特例校の計画申請書を見させていただいているときをすごく思い出しました。西濃学園さんの計画書は、他の学校にはないくら

い、今、私たちが見ている子どもたちは、こういう状態だから、こういう授業が必要なんだ、とものすごく理論立ててくださっていて、それをすごく思い出しました。で、西濃さんの授業を、今日もお話を聞かせていただいて、文科省でも不登校の子の支援には社会的自立を目指すことが重要なんですよ、ということを言っているんですけども、社会的自立に向けて子どもたちに何が必要なのか、というのをきちんとリアルタイムで見極めて、それを授業に反映してくださっているな、とすごく思いました。我々も、なかなか、PR不足なところがございまして、不登校特例校と言っても、なんだそれと思われる方もまだたくさんおられるので、またきちんとアピールしていきたいなと思いますし、ちょっと前に、ホームページもリニューアルいたしまして、不登校特例のページもリニューアルいたしましたので、是非、ご覧いただければ、と思います。以上でございます。ありがとうございました。

嶋野先生 じゃあ、譲先生、お願いします。

譲先生 はい。今日は私も参加させていただいて、教育という広い世界の中で考えると、特殊から普遍へ、といいますかね。個別的な支援から、教育全体へ、というかそうした不登校の子たちが今、私たちに投げかけてくれている、不登校に限らずいろんな問題行動全部対象にしていいのかもしれませんが、そういう子たちの投げかけを受け止めて、それを共有の問題として私たちが考えていく、多くの子どもたちが叫んでくれていることを受け止めたよ、と。そういうことを具体的に表してくださっている、この西濃学園での取り組みではないのかな、と。そういうことでいけば、藤橋、揖斐川町から全国へ、とそんな感じを私は感じました。

嶋野先生 そうですね。三松さん、お願いいたします。

三松氏 私も感想のような形になってしまうのですが、西濃学園さんと知り合ったのが、博報賞を受賞していただいた、ほぼまる 4 年ほど前になるんですけども、毎年、新しいことを始められていて、昨年の地域サミットですとか、今年でいいますと不登校の特例校に一生懸命申請を出されている、とうかがって、毎年何か、新しいこと、改善していこう、とか子どもたちのために何かできるんじゃないかという熱い思いを先生たちからは、常に、感じております。また、地域の方との、やはりいい循環が始まってくると、地域の方との関係性もだんだん熱くなっているな、というのをここにきてまた改めて感じておりまし、きっと、地域の方も、見て見てうちの生徒たち、という気持ちでいるんじゃないかな、というのを併せて感じました。感想でした。今日はありがとうございました。

嶋野先生 まあ、いい地域を持っている、というか、いい関係を長年かけて作られてきた、というか、そこ、すごいですよね。あの、太田さん、皆さんの言葉を受けて、最後に。

太田 はい。西濃学園が学校法人になって、今年は、十周年、そのイベントも今年はまた行おうと思うんですけども、あっという間の十年でもありましたけれども、次の十年、そ

して二十年に向かって、今日いただいた英気、というか、元気、パワーを次につなげていきたいな、と心から思いました。本当に、ありがとうございました。

嶋野先生 終わりにになりました。最後に私から一言だけ申し上げたいと思いますが、実は、ここへ新聞が、中日新聞があるんですね。私、常々、一番いい学校ってなんだろう、最上級ですね、下級、上級の最上級の学校ってなんだろう、って、いつも思っているのですが、それは、僕に言わせれば、自分を変えてくれる学校じゃないか、とっていたんですよ。そうしたら、この新聞を読んだら、日置さんが「ここでなら自分を変えられるのではないか」とか、それから、「自分を変えたい、との思いから積極的に溶け込もうと思った」とか、こういう言葉がここに書かれているんで、自分が考えてきたことが裏付けられたような気持ちになって、まあ、勉強できるようになることも大事、自立していくことも大事、でも人間って、最後の最後まで、もっとより望ましい自分になりたい、なりたいたいと思っているのが人間じゃないかと思っているので、そういうことを具体的に生徒に感じさせている教育をやっているところ、あるいはそれを支える地域があるということはすごいかなあと。是非これからもこれを続けて、より充実したものに、まさに揖斐川から全国発信をしてもらいたいなというふうに思いました。皆さん、本当にありがとうございました。登壇者のみなさま、ありがとうございました。(会場、拍手)



私の主張

日置達也

私はもともとマイペースで少し面倒くさがりやで、あまり周りを気にしないタイプだったと思います。しかし、中学1年生の時にショッピングモールで、見知らぬ男性から執拗に迫られた経験から、他人に対して嫌悪感と人間不信に陥り、学校も休みがちになってしまいました。今、その頃のことを思い出すと、自分以外の周りの事が全て気になって、両親すらも疑ってしまう様になり、マイナス思考はとどまらず、何もする気持ちがわきませんでした。中学校の先生方はそんな私をどうにか登校させようとする一生懸命な気持ちは伝わりましたが、それも怖くて保健室登校をするのが精一杯でした。何もできないまま時間だけが過ぎていく怖さと、このままじゃ駄目だと思いながらも動くことのできない自分へのいらだちの中、私の事を考えてくれている親や先生を避け、仲が良かった友人さえも話すことができなくなりました。

中学3年生になり、私と同じく登校できていない生徒のためにと特別学級が作られました。自分のためだけではないと思いながら、学校が自分たちのために色々してくれることに、自分も何とかしなければと思う様になり、初めは少しずつでしたが段々と登校ができる様になりました。そんな自分に少し安心したのと同時に、ただ登校すると言う当たり前のことが、やっとできていると言う現実、自分の将来への焦りと恐怖がありました。中学卒業後は働くことも考えて、自分なりに仕事を探してみたり、学校を探して見学へと家を出たのですが、いざ学校へ行くと車から降りられずにいました。段々、何とかしようという意欲も薄れていきました。中学卒業後はどうして良いのかわからず、考えても考えても答えは出ずにいつもその現実から逃げ出して、また引きこもりに戻ってしまいました。

そんな中、学校の先生と親から、西濃学園のことを聞きました。自分と同じ様な不登校の生徒が通う学校と聞いて、私は正直信じることができませんでした。自分の様な人間が、また学校に行けるのだろうか、人間としてまっとうにやっていけるのと疑問と不安だらけでした。それでも、西濃学園のことを知ってから、そのことで頭がいっぱいになり、自分が変わるにはこの学校しかないと言う思いで入学をしたいと決意しました。親もまたそんな自分を認めてくれました。今は西濃学園への入学を許してくれた両親に感謝の気持ちで一杯です。

これまで、人を避けながら過ごしてきた自分にとって寮生活は不安だらけでした。どうやってコミュニケーションをとって良いかわからず、また何をするのに自信がなく全て受け身になっていました。「自分は変わりにきたんじゃないのか？今、自分がしていることは何の意味があるのか？」と毎日の様に自問自答を繰り返しました。

体を動かすことは好きだったので、スポーツだけは自分から参加しました。スポーツをしている時だけは少し気が楽になりました。高校1年生の終わり頃に陸上部の経験がある担任の先生が体力作りに一緒に走らないかと誘ってくれました。初めのうちは軽くランニングする程度でしたが段々と厳しい練習もする様になりました。少し辛かったけど充実感がありました。中学の部活では途中で逃げ出したけど、この学園での陸上では逃げませんでした。

た。不思議に思えたし答えは分からなかったけれど、確かな手ごたえが感じられました。私が高校 2 年生になって学園に正式に陸上部が作られました。初めて出た大会は小さな大会で人数も少なかったですが 1500M という種目で優勝することができました。初めて 1 位を取りました。何とも言えない嬉しさがありました。先生の勧めから長距離を走る様になりましたが、本当は辛い種目は避けようと思っていました。でも不思議と逃げる事はしませんでした。やる気がありました。この頃から積極的に自分から練習をするようになりました。秋にはこの揖斐川町でのいびがわマラソンに出場をしました。高校生の私はハーフマラソンの出場で 21 キロを一生懸命に走ることができました。約 4000 人のランナーの中で 126 位。周りが自分のことを褒めてくれた時、僕は初めて自分でやった事が認められたと思いました。この年には学園でも初めてとなる駅伝大会にも参加をしました。走ることの喜びを皆で感じることができました。高校 3 年生になり、高校体育連盟に所属した学園で、岐阜県大会 1500M に優勝することができ全国大会にも出場することができました。全国大会では岐阜県のリレー代表にも選ばれアンカーを走らせて貰いました。また昨年から出場しているいびがわマラソンでも順位を上げることができました。駅伝では個人では区間賞をとることができ、そしてチームも準優勝することができました。走ることは確実に私に自信と行動力を教えてくれました。

また、自分を変えるための一つとして生徒会活動に参加をしました。当初は先輩に頼りっきりでしたが 2 年生の後期には生徒会長に立候補をしました。生徒会長になった私は何でも自分でやらなければ、完璧にこなさなければと 1 人で焦ってやっていたこともありましたが、周りとは協力して取り組んでいく大切さを学びました。

私が高校在学中に力を入れ取り組んだことの中に校内清掃があります。きっかけは学園長が毎朝 5 時ころから一人でトイレ掃除やゴミの片づけ、私たちが普段使っている消毒液の交換などを行っている姿を見て、私は黙って見ていることはできませんでした。ある日、学園長が入院をしたことをきっかけに多くの職員や生徒がこうした清掃活動に自主的に取り組むようになりました。退院をされた学園長からある日、私に提案がありました。それは「掃除の時間のない学校にしたい」というものでした。具体的には、掃除の時間を設けずに、気づいた人が気づいたところを綺麗にしていけば学校は綺麗になるというものです。私は当初そんなことが本当にできるのかという疑問と、どうしたらできるのかを考えた中、高校の生徒会を通して高校生全員にこの問題を投げかけました。まだまだ、完璧とは言えませんが、今では少しずつ生徒一人ひとりがこの活動に意識を向けてくれています。この清掃活動では、今後、自分にとって困難な問題にどう立ち向かっていけばよいのかという事を考えさせてくれました。

私は高校卒業後には高山にある観光会社で働きます。初めての環境の中で不安もありますが、少しでも早く仕事に慣れて、自分を採用してくれた会社のため、これまで支えてくれた両親のために頑張りたいです。自分だけではできないこともあると思いますが、これは西濃学園でたくさん学んできました。自分は周りに支えられているのだという感謝の気持ちを忘れずに仕事をしていきたいと思っています。不登校になって私は多くの人に迷惑をかけてきたと思いますが、たくさんのことを教えてもらい成長することができました。これからはどんな形になるかわかりませんが、自分も他人の支えになれるような人間になっていきたいと思っています。

私の主張

私はわたしでいいじゃない

中村瑠李

「お前、どこ見てるの？」これは、私が小学5年生のときクラスメイトから掛けられた言葉です。

私の右目は、斜視です。鏡の中の自分と目線が合わないことや、距離感が掴めずドッジボールが苦手なことを「仕方ない」と自分に言い聞かせながら生活してきました。

しかし、クラスメイトが発した言葉は、私に辛い現実を突き付けました。「やっぱり私は周りから変な目で見られていたんだ」と。

その後、色々な病院を周り手術を受けることになりました。全身麻酔で目の周りの筋肉を切断し、視線を整える手術です。術後は、目を動かすだけで激痛が走りました。充血が残っていましたが、仕方なく登校しました。友達から目のことを聞かれ、もう隠すことはできないと勇気を振り絞って話しました。

「大丈夫だよ、気にすることないよ。」その言葉を聞いたとき、状況は変わらなくても自分の気持ちに寄り添ってくれる仲間がいることが、こんなにも救いになるのだと心から嬉しく思いました。

ある時、友達がクラスメイトにからかわれ、悔しそうにしている場面に遭遇しました。理由は、他の人にはあまりない趣味を持っているという、ただそれだけのことでした。

私は自分自身の経験やこのような場面から、周りと違うということだけで否定され攻撃されたりすることが、今の世の中には溢れているのではないかと思います。なぜ少数派というだけで、そのような扱いを受けなければならないのでしょうか。少数派の人々はそのために、隠し、恥ずかしがり、悩みながら生活しなければならないんです。

ところで皆さんは魚たちのこんな性質を知っていますか。例えば、メダカを何匹も同じ水槽で飼ったとします。しばらくしてストレスの溜まったメダカ達は、1番体の小さなメダカを追い掛け回すようになります。追いかけられたメダカは餌も満足に食べられず、いつも他のメダカたちの様子を伺いながらひっそりと生活するようになります。最悪の場合はストレスで死んでしまうこともあるそうです。私はそのことを授業の中で知り、メダカの性質をただただ虚しく思いました。でもふと思ってしまったのです。周りと違うというだけで攻撃してしまう私たちの社会は、メダカの世界と同じなのではないかということ。少数派の人たちは、追いかけられたメダカのような存在なのではないでしょうか。

いや違う。そうではないはずです。少数派はそんな存在なんかじゃないはずです。そう思えるのは、私たちにはメダカにはない力があるからです。それは考え、理解し、認め合う力です。私たちは、どうすれば少数派や多数派関係なく、互いに尊重し合うことができるのでしょうか。

そのことについて私は、少数派を批判してしまう背景から考えてみたいと思います。数の多い少ないによって見方が左右されるということから考えると、それは私たちの生活の中

に根付いた「多数決の原理」が関係しているように思います。

多数決によって物事を決めていくことは、私たちがよく使う手段ですね。だから私たちは、数の多い方が認められるという感覚に陥りやすいのです。

このことを私たちの生活に置き換えたとき大切にしたいことは、『多数決の感覚だけで自分の見方を決めてしまわない』ということではないでしょうか。

一歩進んで、積極的に関わろうとしたとき、関わり方に迷うこともあると思いますが、コミュニケーションをとっていく中で、意外な発見や発想の転換がきっと起こるはずです。

少数派であることに変わりはないのかもしれませんが、関わり合うことそのものが、安心感として伝わっていくと思います。そうすることで、「私はわたしでいいじゃない」そう胸を張って生きていける社会につながっていくと私は確信しています。



報告会 振り返りシート

本日は、ご参加いただき、誠にありがとうございました。

次回以降の報告会をより質の高いものにするために、皆さまのご意見・ご感想を集めております。ぜひご協力ください。

■お客様情報

性別	☐ 男	☐ 女							
年齢	☐ 10代	☐ 20代	☐ 30代	☐ 40代	☐ 50代	☐ 60代以上			
お住いの地域	☐ 北海道	☐ 東北	☐ 関東	☐ 中部	☐ 近畿	☐ 中国	☐ 四国	☐ 九州	☐ 海外

■今回の報告会について

ご参加いただいた きっかけ	☐ ホームページ	☐ 新聞	☐ チラシ	☐ 学校	☐ 知人	☐ その他（ ）
報告会の満足度	☐ 満足	☐ やや満足	☐ どちらともいえない	☐ やや不満	☐ 不満	
報告会の内容について、印象に残っているものをお答えください。※複数選択可						
☐ 講演「共に育ち合う教育」 ☐ 西濃学園「私の主張」 ☐ 西濃学園「学校紹介 PV」 ☐ シンポジウム「コラボレイト」 ☐ シンポジウム「リカバリー」 ☐ シンポジウム「ライフプランニング」 ☐ その他（ ）						
職員の対応	☐ 満足	☐ やや満足	☐ どちらともいえない	☐ やや不満	☐ 不満	

■その他

また西濃学園の報告会に 参加したいと思いますか？	☐ 参加したい ☐ どちらともいえない ☐ あまり参加したくない ☐ 参加したくない
今回の報告会に対して、ご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書きください。	

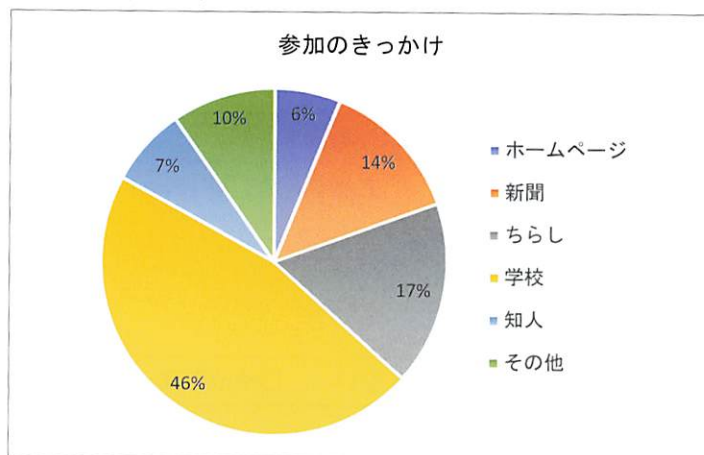
ご協力ありがとうございました。

不登校特例校アンケート集計結果

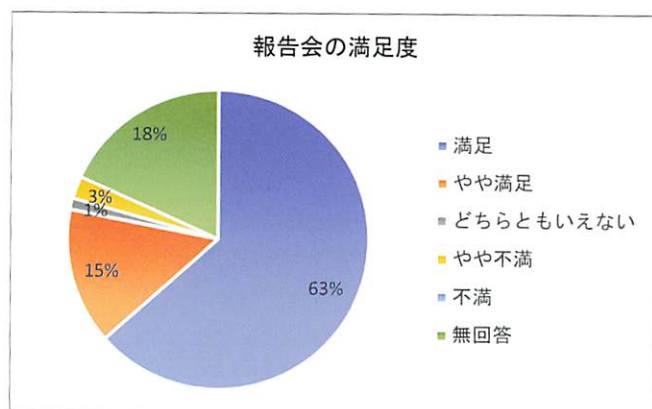
Q1 性別・年代



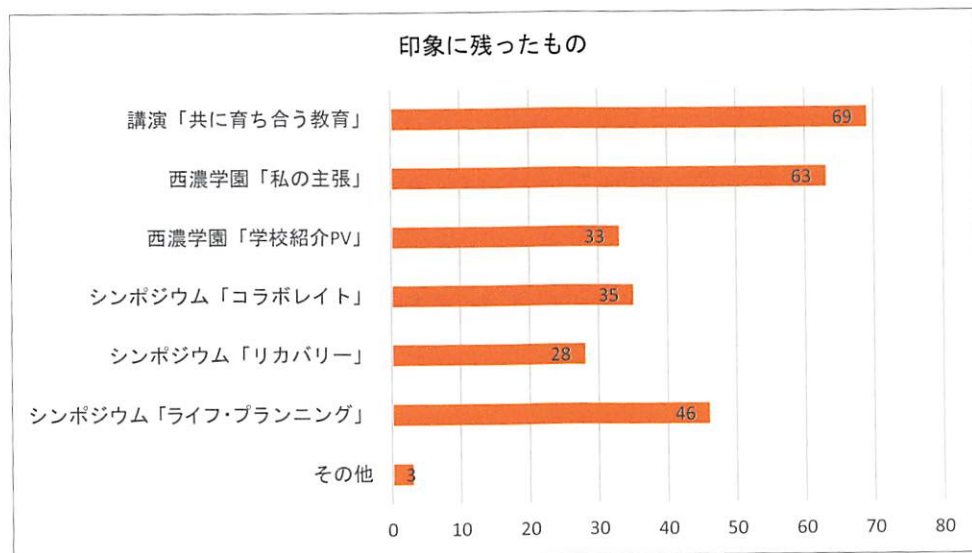
Q4 参加のきっかけ



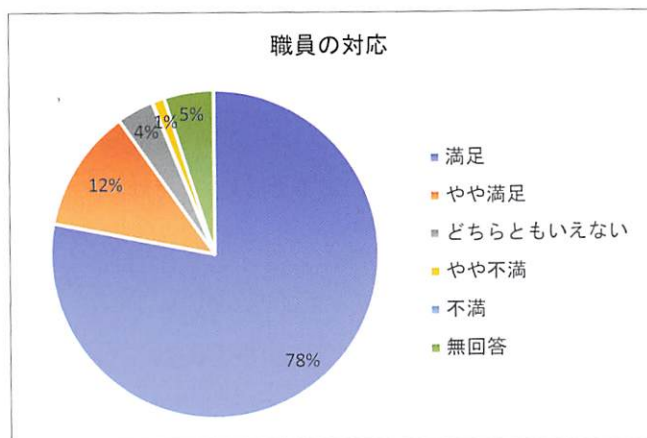
Q5 報告会の満足度



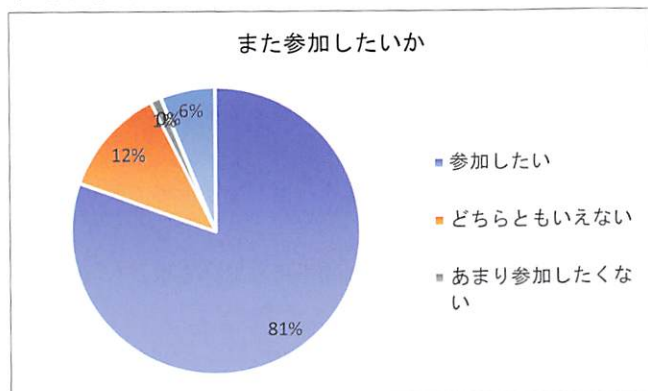
Q6 印象に残っているもの（複数回答）



Q7 職員の対応



Q8 また参加したいか



Q9 ご意見・ご要望

● 講演「共に育ち合う教育」

- とてもおもしろく、子育て・仕事に活かせそうだなと思いました。
- 大変勉強になりました。小5、6で学校へ向かえなくなった我が子の心の中と、私自身の心の中が、客観的に見ることができたように思います。
- 先生の話を目の前に子どもにどう適用していったらいいか、考えるところです。自己肯定する材料より、否定する材料の方が多くて、明らかにマイナスで生きています。これからどうやっていけばいいか。集団生活、子供の群れの力に期待するところ大です。
- 予防的カウンセリングや児童期、青年期の子ども達への支援のあり方においては、親、教師目線両方でとても勉強になりました。

● 西濃学園「私の主張」

- 学園生・元学園生の声を生で聞けたことが良かった。
- 心に響きました。とてもとても良かったです。
- 過去の自分～現在までの様子が聞けて良かったです。
- 感動しました。西濃学園の中で、自己肯定感を高め、確実に自分の生き方を見つけ、人生を切り拓いていこうとしている日置くんの姿こそが、実践の成果そのものだと思います。
- 特に心に残り、これから社会人として頑張ってほしいと思った。

● 西濃学園「学校紹介 PV」

- 感動しました。1年間、子どもも先生方とともに楽しく頑張っていたのだと知ることができました。
- 「オール揖斐」として一体となった「人育て」を心から実践していると感じて、感動で涙が溢れました。

● シンポジウム

- 秋田の例なども知れて、揖斐川町に住むことについて改めて考えることもできた。
- こういったシンポジウムがもっと幅広く開催されるといいと思いました。
- 「リカバリー」：学力不足は自信のなさに直結するので、学力を上げる試みはとても有意義だと思います。一方、今まで頑張ってもできなかったという気持ちから、もう傷つきたくないからやりたくない、という気持ちにもなりやすく、取り扱い注意と感じます。子ども各人の困っているところに寄り添ってもらえたらとてもありがたいです。
- 「ライフプランニング」：タイトルから予想されるものと違っていました。先生の実感→子供の反応→新たに問い直すという流れが“共に育ち合う”ということを実践しておられると感じました。
- 「ライフプランニング」：生活班単位で自己を見つめ、他者理解を目指して学活等で取り入れていけたらと思います。
- 「コラボレイト」：地域との関わりが非常に評判がいいので、興味を持っています。もっとも多くの時間を地域に出て行ってほしいと思います（コラボとても大切です）。
- 詳細な年間プランがなく、浅い報告になってしまっていたのは残念です。
- 司会の先生のお話がわかりやすく良かった。

● その他

- 大変学びの多い会でした。子供も親も、学校復帰だけにこだわらず、社会的自立に向けて色々な方向性を考えるべきだと思いました。不登校の子どもたちが教えてくれていることを受け止めるということが印象に残りました。不寛容な社会になりつつありますが、集団で生きづらい子どもたちが活躍できる社会になるといいと思っています。
- 藤橋に生まれ、自分の故郷にこのような素晴らしい学園のあることを大変うれしく思っております。今は藤橋に住んでおりませんが、祭礼時は実家に帰り楽しんでおります。その時、学園の生徒さんたちが気軽に話に応じてくださることがとても嬉しいです。
- 藤橋診療所のものですが、この10年来の間に年々交流が深まり、笑顔・挨拶も良くなり、行事も中心的に行ってもらい感謝しています。
- 学業だけでなく、人間の基本である人と人の関わりについて愛のある学びについて、学園の姿勢が印象に残りました。
- 先生方の熱意が子ども達の心を動かし、自立に向かわせていると再認識しました。
- 地域の中での学園について、今まで正面から向き合ってこなく、どんな所だろうと疑問に持ったままでした。今回の報告会で大変よくわかり、活動の継続を望みます。
- 知識より知恵、主体的な行動を重視されていて素晴らしいと感じました。
- 「コラボ」「リカバリー」「ライフプランニング」という科目を設置されたことは、子ども達にとってとても良いことだと思いました。
- 西濃学園をもっともっと応援したいと思った。日置さんのようにここへきて良かったと思ってもらえるとても嬉しい。
- 不登校の子どもたちの教育を他の全ての教育に広めることが必要と感じました。

○ 要望

- 地域の方の声も聞けると良かった。
- パワーポイントのスクリーンが見えにくい。スクリーンの半分まで前の席の人の頭で見えなかった。
- スクリーンの映像が見えにくかった。後ろの席ではほとんどわからなかった。
- 町内に知らして、大ホールで開催いただくようお願いしたい。
- 「コラボレイト」：藤橋診療所地区の方のお話も伺えたら、もっと参考になったと思いました。
- 国や県、町からの支援体制はどのようになっているか知りたい。
- シンポジウム方式も良かったですが、ディスカッション方式でやっていただけると、もっと参加者の意見や質問がしやすかったと思います。
- 西濃学園全体の教育計画の中での位置付けと実態把握から導き出したプランと個別指導計画があるとすれば、それらの関係性など活動の詳細をお聞きしたかった。次年度は今年の課題をどのように解決されたのかをPDCAサイクルをどのように回されたのかをぜひお聞きしたい。
- 3つの科目全てではなく1科目に絞っての報告でも良いのではないのでしょうか。
- 4時間の開催時間を3時間程度にできるともっと良かったと思います。
- 揖斐郡の公聴会としても視察等、学ばせていただきたいと感じました。
- 他の特例校の実態情報が聞ける機会を設けていただければと思いました。

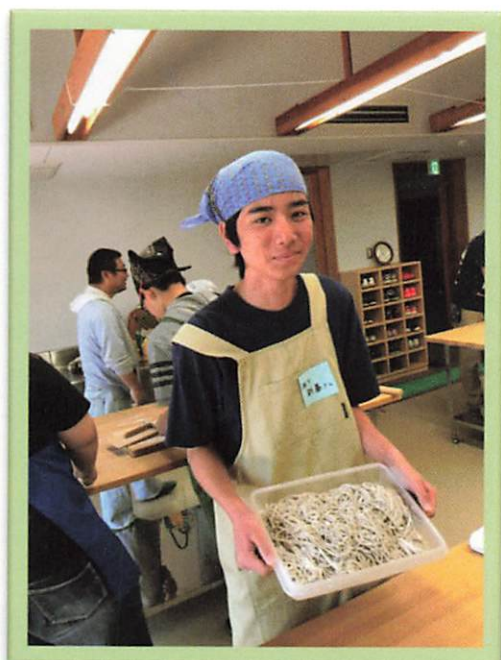
日常生活



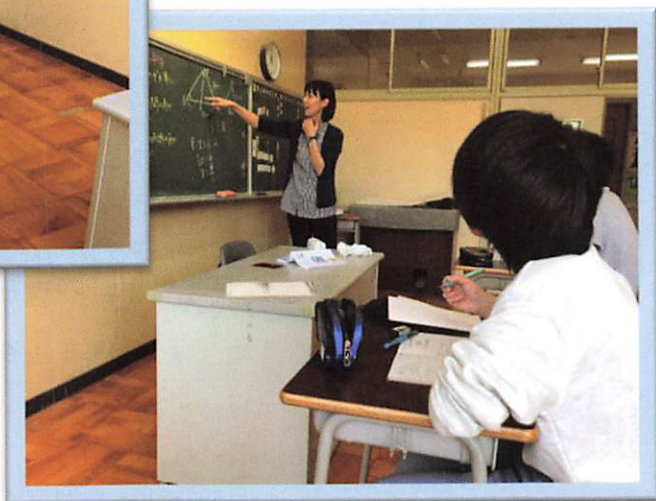
夏山登山 ・ 文化祭



地域交流



コラボレイト・リカバリー



平成29年度
西濃学園教育報告書
文部科学省「不登校特例校」の指定を受けて
1年目の実践

平成30年3月発行

発行 学校法人西濃学園
印刷 (株)旭クリエイト

〒503-2124 岐阜県不破郡垂井町宮代1478
TEL 0584-23-3211